

## ローマ進軍とその周辺 (4)

エミリオ・ルッス 著

柴野 均 訳

### 第一六章

セノルビの家でわたしが包囲されている間に、イグレスィアスとゴンネーザのファシストたちがポルト・スクーゾの町に侵入した。

50人ほどの彼らは全員が武装していた。その大半は金で雇われた鋤夫たちだった。指揮をとっていたのはデ・フィリッピという男だった。

彼はテッラノーヴァの富裕な家のひとり息子で、歳は25だった。戦争が終わると、彼は父親の財産を浪費することに時間を費やした。負債のしりぬぐいにうんざりした家族は、彼を家から追い出さざるを得なかった。短い遍歴期間ののちに彼は運転手としてイグレスィアスに落ち着いた。そしてすぐに彼はその町のファシスト行動隊の指導者になった。

ポルト・スクーゾへの遠征は不意打ちだった。

ポルト・スクーゾはもっぱら漁業と海運業で暮らしている人々の小さな町だった。その町では船頭たちが最大の政治的組織である組合を作っていた。全員が復員兵士で、海軍での従軍経験を持っていた。彼らもまたファシズムに対して共感を抱いていなかった。フォワ兄弟が指導者を務め、彼らは住民の間に強い影響力を持っていた。兄弟の母親は小学校教師で、年老いてはいたが、その善良な性格によって全ての人から尊敬されていた。直前の選挙で落選した前町長が彼らの敵対者だった。

前町長に対してはその任期中の公金着服の疑いで刑事訴訟が開始されていた。前町長はこれに反撃し、自らの身を守るために、ファシストによるカリアリ占領のニュースに応じて、この頃ファッショ支部を作った。彼こそがファシストの遠征を引き起こし、案内役を務めた人物だった。

ファシストの部隊がポルト・スクーゾに入ったのは、漁師たちが沖に出ていて船頭の多くが船や波止場で荷物の上げ下ろしに忙しかったときだった。ファシストたちが港に来て初めて彼らの存在に気づいたのだ。

「誰がサルヴァトーレ・フォワかね？」ファシストの指導者が叫んだ。

「ここにいるよ」船の中からの声が応えた。「俺がそうだ」と呼ばれた男が言った。そして波止場に降りた。

あっという間に彼はファシストたちに取り囲まれた。彼のまわりの連中はピストルを突きつけて「ファシズム万歳！」と叫ぶように命じた。

「俺は絶対卑怯な真似はしない」とフォワは答えた。

発砲を命じる声があり、フォワは撃たれて倒れた。

銃声に驚いた船頭たちはパニックに襲われて逃げ出した。だが他の船頭たちと波止場に

た弟は逃げなかった。たったひとりでたじろぎもせず、両手のこぶしを握りしめ、ファシストたちに向かって突進した。しかし数歩しか進めなかった。二度目の一斉射撃が襲い、彼も倒れた。蜂の巣のようになって、兄のかたわらに倒れた。

「祖国を裏切る者はすべてこんな風に死ぬのだ」前町長はうそぶいた。

船頭たちは船にたどり着くと、碇をあげて沖に向かった。彼らを抑えられなかったファシストたちは、船の帆に向かって小銃を乱射した。そしてフォワ兄弟の死体に護衛をひとり残して、ファシストたちは歌いながら町を練り歩いた。

それは見事な勝利だった。

住民は彼らの勝利に立ち会うことができなかった。教会の鐘は絶え間なく鳴り続けたが、それははるか昔にチュニジアの海賊が突然侵略してきたときのようなようだった。警報を伝える大きな貝殻が出す轟音が海岸に鳴り響いた。住民は大急ぎで町の外に逃げ出し、町に残った数家族も自宅にバリケードを作った。

主な反対派の人々の家と労働組織の事務所をファシストたちは破壊略奪した。

フォワ兄弟の母親は娘のひとりに付き添われて、波止場の息子たちの死体のもとに這うようにやってきた。護衛役のファシストは死体に触れるのを阻止し、女たちを遠ざけようとした。だが脅しは効果がなかった。彼女たちは愛する者たちのそばにとどまった。身じろぎもせずに地面にひれ伏した彼女たちも死んだように見えた。

日が暮れると、死体を動かすことにファシストたちも同意した。兄弟の遺体は父親の家に並べて安置され、女たちの同情の念は遺体を花で埋め尽くした。棺台のまわりの嘆く声は高まり、それは外まで聞こえた。

ファシストたちは侮辱されたと考えた。再び全員がその場にピストルとナイフを手にして介入した。家族以外の者はその場から追い出され、女たちには泣くことすら禁じた。

ファシストたちはイグレスィアスとゴンネーザに戻った。ポルト・スクーズはもはや征服した領土だった。県知事が介入して町の行政体制を解散させ、前町長が王に直属するこの町の執政官に任命された。警察と司法当局はそこで起きた事態に関心を寄せないことが適当であると考えた。一年間にわたって事件には厚いヴェールがかけられ、正義を求める訴えも容易に沈黙させられた。だが死者の縁者たちは魂を失うことがなかった。12月22日にあらゆる政治的犯罪に対する恩赦の政令が発表されていた。ポルト・スクーズの事件はその二日後に起きた。したがって恩赦はこの事件の関係者には適用されなかった。サルデーニャ島のファッシュ指導者たちが対立した有利な時期を利用して縁者たちは、この事件に関する刑法上の手続きを司法当局に開始させることに成功した。デ・フィリッピと主犯格の四人が逮捕され、カリアリの陪審法廷で裁かれた。裁判は異常な進行過程で行われた。ポルト・スクーズの住民の大半がカリアリの町にやってきていた。わたしは損害賠償請求の証人のひとりとして裁判にかかわった。

毎朝被告たちが到着すると、カリアリのファシストたちは歌とパレードで彼らに敬意を示した。だが被告たちは決してお祭り騒ぎに浮かれていなかった。死者たちの重みが加わっていたからだ。自分たちが発砲したのではない、と被告たちは主張した。

「《ローマ進軍》式のやり方が行われるのをわれわれは許さない」とファシスト側の弁護士たちは繰り返した。

「いやそうじゃない、そうじゃない」裁判長は説明した。「ここで問題になっているのは《ポルト・スクーザへの進軍》なのだ。」

前町長は証人として陳述した。上着のボタン穴にはこれ見よがしにイタリア王室の十字架のついたリボンをつけていた。彼は最近の功績によって騎士勲章を拝受していたのだ。

「わたしは次の点を明らかにするものです」彼はこう証言した。「それはフォワ兄弟が姿を消して以来、町の秩序が乱されたことは一度もないということです。」

「<sup>アッザッシーノ</sup>ひとつろし！」他の証人たちや傍聴席の聴衆たちの間から叫び声があがった。騎士勲章佩綬者である前町長はこの侮辱の言葉にたじろぎ、裁判長は証言をいったん休止させねばならなかった。

やがて審理は再開された。わたしはまだ自分の席についていなかった。というのも、どういう経路かはわからないが、わたしのものに一通の封印された手紙が届いていたからだ。その手紙には次のようなことが書かれたカードが入っていた。

「証言を断念しなければ、おまえを犬ころのように殺してやる。イタリア万歳。先刻のファシストグループより。」

裁判長の威信にもかかわらず、法廷の動揺は大きかった。死者の母と妹が、ピストルを突きつけられて遺体のかたわらで泣くことを禁じられた、と証言すると、嵐のような憤激の声が法廷を包んだ。それまで被告たちの責任を弱めようと一貫して口を挟んできた検察官さえも厳しい口調でこう述べた。

「犯罪がこのような形態をとるときには、いかなる政治的正当化も持ち出すことは不可能となる。ここでは政治は無縁である。」

しかし政治は無関係ではなかった。被告の無罪放免が必要であると陪審員たちにわからせるために、県知事は私的なルートを通じて懸命の努力をした。その当時は非常に大きかった大司教の影響力をも含め、あらゆる影響力が動員された。威信のためにも政府の政策が決定的な敗北を蒙らないことが必要だ、というのであった。ファシスト系の新聞はすべてこうした主張で一致しており、その行間からは暴行の脅迫がすけて見えていた。

評決が下される日、裁判所の近くではカリアリのファシストの隊列が、旗を掲げ音楽を鳴らしながら、釈放の知らせを待っていた。釈放された被告と仲間の行動隊員たちをイグレンシアスに連れていくために、数多くの自動車が待機していた。

イグレンシアスの町では300人分の宴会の用意が彼らの到着を待っていた。歓迎と勝利を祝う準備が整えられていた。判決が下される以前から釈放は確実なことと思われていた。しかし陪審員たちは全員一致で有罪の評決を下した。ファシストたちの思惑と市民の考えの間には深い溝が存在していたのだ。

被告のひとり冷静にこう発言した。

「俺たちのやったことは、もっと重い刑にあたるさ。」

デ・フィリッピは同じ意見ではなかった。彼は釈放を固く信じていた。禁固20年という判決を前に、彼は指導者の態度を取り戻して無関心を装った。わたしたちの方を振り向くところ叫んだ。

「俺の知ったことか！」

これはまさにファシスト風の言葉だった。このような状況の中でこう発言したことで、彼

はファシスト陣営の中で殉教者としての名声と威信を獲得した。

ファシストの隊列は解散した。イグレスィアスの音楽隊は演奏を断念した。自動車はガレージに戻された。イグレスィアスでの宴会は行われなかった。食堂の主人は宴会の準備をすべて整えており、その支払いを要求した。この争いは長く続いた。食堂店主は金を払ってもらえず、邪魔者扱いされて、政治的な憤慨を表明したため結局はファッショから追放された。

デ・フィリッピは判決の翌日わたしに次のようなことを伝えてきた。彼がそう長くは監獄にいないだろうということ、彼の釈放はわたしの生命の終わりを意味するだろうこと。

脅迫と予言は正確に彼が言った通りには実現しなかったが、彼の意志とはかかわりなく当時の状況がそれを可能にした。

ファシズムは市民の陪審員による評決に我慢できなかった。それを体制の権威に対する耐え難い挑戦とみなした。法務大臣ロッコはこの問題に個人的な関心を寄せ、この判決を法的過誤であると判断した。上級審に介入をして、判決の二年後に恩赦を与えた。有罪判決を受けた被告たちは釈放され、一度は人々の無理解によって禁じられた祝宴に全員が参加することができた。彼らのためのデモンストレーションはイグレスィアスで荘重に行われた。勝利を祝う行進は当時作られた歌によって終わった。その歌は流行していたわけではないが、イタリア中の広場ではよく知られていた。

メ・ネ・フレーゴ  
俺は心配しない  
デッラ・ガレ  
懲役になったとしても  
カミーチャ・ネーラ  
黒シャツは  
トリン・フエラ  
必ず勝利するだろう

デ・フィリッピは監獄から出て、わたしはそこに入った。彼はわたしのことを忘れず、葉書をよこした。彼はこう書いていた。「監獄にいるのを神に感謝することだな。」

しかし話を1922年のクリスマスに戻すことにしよう。

カリアリのファシストたちはわたしがセノルビでの包囲を無傷で逃れたことに非常に憤慨していた。彼らの集会では生死を問わずわたしを捕らえるという誓いが交わされた。わたしに対する武装遠征がすぐに準備された。だがわたしの友人たちが知らせてくれたおかげで、身を守るために必要な措置をとるだけの余裕があった。

わたしが身を隠していた村は山岳地帯にあった。そこへたどり着くには数本の道しかなかった。何か所かの峠を武装した仲間たちに占領させ、戦時に孤立した歩兵部隊が「警備をつけた上での休止」と呼ぶのと同じ状態で二週間過ごした。大人たちは防衛部隊に、子どもは伝令に、歩哨やパトロールまで配置した。復員兵士たちは最良の部隊構成員となった。二週間の間この村は世界とは孤絶していた。

機関銃を装備したトラックに乗ったファシストたちがその間に四回も出発した。そして途中まで来たところで、状況を知らされるとその度に引返したのだ。山岳地帯の、地理に暗い、敵対的な地域で冒険的な行動に出るのは難しかった。

自信を失った彼らはとうとう野砲を持つ砲兵隊の同行を求めたが、県知事はこれを拒否した。こうしてわたしの身辺を騒がすことは起きなかった。

こうした出来事すべては、勝利者たちが征服とともに約束した、平和な状態をサルデーニャ島にもたらし出すこととはほど遠かった。政治犯に対する恩赦が与えられたが、暴力はいたるところで続いていた。

カリアリからそう遠くないマルミッラという農村にサンナという有名なファシストのリーダーがいた。彼は戦時中に脱走と強盗の罪で死刑を宣告された経歴を持っていた。彼は今では行動隊の一団を率いて恐怖をまき散らしていた。デズーロではファシストたちが反対派のふたりの家に夜襲をかけ、金や貴重品、食料などを持ち去った。カリアリでは復員兵士の反ファシストで、戦争中の功績によってよく知られていたチェーザレ・フロンジアが真昼間に往来で暗殺された。同じカリアリの町では、エフィジオ・メリスの未亡人が墓場で侮辱と暴行を受けた。それは彼女が夫の墓石に花を捧げるのを妨害するためだった。

こうした暴力のニュースが島中を駆けめぐった。ファシズムは政治党派とはみなされず、政府によって保護された山賊の一種と考えられた。大地主たちはファッショに加盟したが、残りの島民たちは軽蔑の念を日に日に強めていった。こうした状況は政府にとっても望ましいものではなかった。民衆の広い合意が必要だった。特にムッソリーニがその直接の代表であると自負していた復員兵士たちの合意が必要だった。そのために突然政策が変更された。県知事たちが更迭され、サルデーニャ島にはファシズムと政府の代表として、全権を与えられた知事であるガンドルフォ将軍が派遣された。

## 第一七章

ガンドルフォ将軍は戦争末期に第八軍団の司令官だった。1918年10月のヴィットーリオ・ヴェネトの戦いではモンテッロからグラヴェ・ディ・パパドーポリの間で一連の不運に見舞われ、軍の指揮任務からはずされてしまった。彼はファッショに加盟し、もっとも華々しい指導者のひとりになった。ファシストの軍事組織の規程を作成し、《ローマ進軍》にも参加した。個人的な暴力に対しては批判的なことで知られており、復員兵士の間では高い威信を保持していた。サルデーニャの復員兵士たちの心をつかみ、見境のない暴力の時期ののちに島の世論を獲得するのに彼こそが最適の人物であるとムッソリーニは考えた。

将軍はさっそく島を訪れ、幅広いコンセンサスを得るには戦略を転換する必要があることにすぐに気づいた。それまでになされた犯罪に対する非難と法を犯す者を厳しく罰する姿勢を公的に明らかにすることから彼は始めた。すべての復員兵士たちに対して声明を発表し、彼らをはめたたえるとともにファッショへの加盟を呼びかけた。

こうした彼の姿勢は強い印象を与えた。彼は実際に政府を代表しており、それまで政府の名において政府の保護下でなされてきた暴力を否認した。ファシストたちはそれに対して憤慨した。反対派の人々は法の復活を期待し始めた。だが将軍が平和を呼びかける一方で、土地のファシストたちは戦闘行為を継続した。将軍は異議を唱えなかった。彼は自分が戦争と平和のどちらを与えるのかを決める立場にあることをすべての人々にわからせたかったのだ。既存のファシズムと戦うために、彼には新しいファシズムが必要だった。後者を獲得できることが確実でない限り、前者を葬り去ることはできなかった。このこともまた彼はくり返し公の席で明らかにしていた。

將軍の呼び掛けは成果をもたらさなかった。しかし彼は落胆しなかった。すべての政治指導者と接近し、わたしとの会談を求めた。わたしは彼との会談はまったく無益だと考えていた。わたしは民主的共和主義的独立派を代表していた。いったいわたしが彼から得るものがあるのか？ 彼がわたしから得るものがあるのか？ だがわたしの仲間たちは話し合いを行うことを主張し、会談は開かれた。

会話は長く続いたが、わたしたちは最初からはっきりと対立していた。彼はすべての点で譲歩する用意があることを明らかにしたが、同志たちとわたしがファシズムに同調することを要求した。そのような条件を付与することは政治的不合理であるとわたしは述べ、政府が法を尊重し、また尊重させることを求めた。わたしの党派が状況を左右する力を持っていながら、われわれが反ファシズムにあくまでも固執する理由を將軍は理解することができなかった。わたしは自分の言い分をできるだけ明快に説明する努力をしたが、將軍は理解しなかった。それどころか、わたしが自分の立場をはっきりさせればさせるほど、彼はわたしがファシズムに反対していることに驚いたのだ。わたしが戦争に参加した以上わたしが間違いなくファシストである、という原理から彼は出発していた。それ以外のことは彼にとっては重要ではなかった。

「わたしは政治家ではない」 將軍はこう結論づけた。「だからあなたの理論的な立場を完全には理解できない。わたしは軍人だ。戦闘が行われる場所であれば、わたしはその場に赴く。そしてファシズムが戦う軍隊であるから、わたしは自分の命をそれに捧げるのだ。これが肝心なことだ。それ以外は何の重要性も持たない。」

彼もまた、デ・ボーノ將軍と同じように、ベルサリーエリ兵団の出身だった。これはリソルジメント期にラ・マルモラ將軍によって創設された歩兵部隊で、クリミア戦争で最初に実戦に投入された。それ以後ベルサリーエリ兵団の特徴は運動機動能力の高さにあるとされていた。イタリア陸軍の中でのベルサリーエリの位置は、政治におけるサンディカリストや文化における未来派にあたるものだった。ガンドルフォ將軍とわたしの会話は成果をもたらさなかった。しかし彼は氣力を失わなかった。二、三人の著名な反対派の協力をとりつけることに成功し、公開集会でのキャンペーンを開始した。彼は住民に直接話しかけた。

「わたしはすべての反対派に、特に兵士たちに呼びかけたい」 彼はこう述べた。「諸君が反ファシストであるのは、きみたちの国のファシストがならず者だったからである。わたしは彼らの全員を監獄に送り込もう。」 群集は拍手喝采をした。「ルッス議員は詩人であるが、政治は韻文ではなく散文でなされるものである。……たしかに立派な理由はある。……ルッス議員は憎しみと流血の闘いが続くことを望んでいる……（本当のところ、わたしはまったくそのようなことは望んでいなかった）……わたしはきみたちの父親であって敵ではない。わたしはきみたちの司令官なのだ」と元兵士たちに向かって語った。「わたしは今までの県知事ではない。政治的自由が脅威にさらされているときみたちは言う！ それならファシズムに加わって、自由を守りたまえ。そうすればきみたちが状況を支配するようになるだろう。わたしはきみたちの手にファシストたちを委ねよう。きみたちは彼らを好きなように扱えばよい。真のファシストはきみたちでなくてはならない。」

このような話し方は強い印象を与えた。反対派の多くが態度を決めかねるようになった。

「きみたちは民主主義者なのか？」 將軍は問いかけた。「そしてわたしは民主主義者では

ないのか？ きみたちは独立派で共和主義者なのか？ きみたちはそのままいて構わない、誰もそれを邪魔はしない。ファシズムはモザイクであり、さまざまな色や形が寄り集まることで輝きを増すものなのである。」

ガンドルフォ将軍はたしかに心理学者だった。暴力に抵抗することは困難だが、お世辞に抵抗することはさらに難しい。前者に抵抗できた者も後者には屈したのだ。

ある若い医師がよくこう言っていた。「困難な時期には自由に対して忠実な立場を守るべきだ。自由が脅威にさらされれば、それを防衛すべきだ。自由が失われれば、死ぬべきだ。」彼も県知事との会談に招待され、三〇分ほどためらい、そしてファッショに加盟した。

こうした誘惑に身を委ねることで、それまで受けてきた迫害に復讐できると考えた者もいた。カリアリの近くのピッリという村では、反対派のリーダーがファシストたちに棒で殴られ、ヒマシ油を飲まされたことがあった。彼はガンドルフォ将軍のもとに出頭し、ファッショに加盟すると、自分に対する暴力を命じた行動隊の指導者を広場において棒で殴らせた。マルミッラ地方のヴィッラマールではメリスという名の反ファシストのリーダーである農夫が、村のファシストたちによって三度投獄された。そしてその後も襲撃を受け、棒で殴られた。鎖で縛られた上で、一日に二度もヒマシ油を飲まされた。ファシストたちはそれで満足せず、彼が家の外に出て自分の土地を耕すことすら禁じた。彼はこの禁止令を破り、ピストルで撃たれた。奇跡的に命はとりとめたが、何か所も傷が残った。将軍は彼と長く話をし、そして彼は自分の村のファシストのリーダーとなった。それも全権を与えられたリーダーに。

彼は村に戻ると、既に存在していたファッショを解散させて別のファッショを作った。そして続く一週間の間かつて自分を迫害した者たちを気が狂ったように棒で殴り、ヒマシ油を飲ませることだけを続けた。

同じような事件はほかの村でも起きた。警察は政府からの命令を受けており、何の異論も唱えず公式の指導者たちを支持した。規律は自由な捜査を認めなかったし、そうでなければ規律が存在するとはいえなかった。

懲罰遠征や暴力沙汰の中で勇者の評判を得た者たちが、今では不遇に沈み、反撃することもなく恐怖の中であらゆる辱めを受けていた。政治闘争において国家の保護が意味するものを彼らは身をもって学んでいた。そして抑圧が強まるとともに次第に彼らの考え方は、その運命と同じように、変わっていった。彼らは強い国家を欲したのではなかったのか？ それで今では幅広い自治権を持つ政府を切望していた。戦闘的な政治を彼らは求めていなかったか？ ところが今では彼らは全員が平和主義者となっていた。「不滅の原理」を彼らはあざ笑ったのではなかったか？ 今や彼らの全員が民主主義者を自称していた。こうしてわずか数日の間に彼らは熱狂的な反ファシストに変わってしまい、わたしの行動を賞賛し自由をたたえる電報を彼らの多くから受け取るようになった。思想は行動に先んじるのか、それとも行動の後につき従うのか？ この問題は複雑な様相を示していた。

勝ったのはガンドルフォ将軍だった。ローマで自分の手首を切る決意を述べたわたしの友人を讀者は覚えていられるだろうか？ 彼は早い時期にファシズムに移行した者たちのひとりであり、すぐに大きな権威を持つ地位を獲得した。そして自宅を鉄条網で取り囲み、最後の弾丸の一発まで戦う誓いを立て、砲兵隊まで引っぱり出そうとしたもうひとりの友人の弁護士はどうなっただろうか？ 彼は自分の立場にもっとも固執した。長い議論の果てに県知事は

彼にこう言った。「きみが決めなさい。監獄に行くかファシズムに加わるか。」彼は決断するのに五分間の猶予を求め、五分後にファシズムを選択した。県知事は彼を高い地位につけた。それからすぐにわたしは彼と再会した。彼はわたしの家に訪ねてきたが、わたしは会うことを拒否した。だが彼はそれも構わずに入ってきた。

「役に立ったのかね」わたしは彼に言った「大量の弾丸は？ 鉄条網はどうなったのかね？」

彼は答えなかった。ポケットから16世紀の書物の古い版を引っ張り出し、そのタイトルをわたしに見せた。『シモン・シナーイ・ダ・ルッカの最後の告白。初めはローマ・カトリック教徒にしてカルヴィニストとなり、その後にルター派、そして再びカトリックとなりしが、つねに無神論者であった男』

わたしの学校と軍隊での友人であり、彼のセノルビの家で包囲された、友人のことを読者は覚えているだろうか？ 彼もファッショに加盟した。彼の飛行士の弟は？ 弟もファッショに加わった。一番下の大学生の弟もファシストになった。ガンドルフォ將軍はこのことを最大の収穫として喜んだ。クリスマスの前夜ある駅でカリアリに向かうわたしがやってくるのを心配しながら待っていた友人たちのことを覚えているだろうか？ 彼らのうちでふたりはその勇気の点で抜きん出ている。ふたりは非妥協的な共和主義者だった。両者ともにファッショに移り、「第二期のファシズム」という名前のファシズムを創始した。彼らは厳しい試練を経験した。ファシズムに移行することで彼らは自分たちだけでなくサルデーニャ島の運命をも転換できると信じた。彼らはガンドルフォ將軍の有能な副官になった。微妙なやり方でファシズムを変えられると彼らは信じていたが、簡単に吸収されてしまった。すぐに彼らは下院議員となり、ファリナッチをリーダーとする急進的革命派に所属した。そしてわたしに対する嫌がらせを行った。そして彼らは仲違いをし、互いに相手よりも自分の方がファシスト的であると宣言した。

大学時代のある同僚がいた。彼は戦友でもあった。彼は伯爵、カーオ・ディ・サン・マルコ伯爵だったが、共和主義者で民主主義者だった。彼は自分の家系をこれ見よがしに自慢するような人物ではなかった。

將軍は彼も簡単に奪い取った。彼はファッショに移った。彼もまた下院議員となり、祖先伝来の武具の展示に熱心になる。

こうして次第に初期のファシズムは葬られた。第二期のファシストたちは第一期のファシストたちの新聞を燃やし、ファッショ事務所を占拠した。こうした内部闘争に気をとられて、反対派は忘れられた。しばらくの間わたしは妨害行為に悩まされずにすんだ。ファシストとなったすべての友人たちとの関係をわたしは断ち切ったが、わたしが生きていられるのは彼らの「犠牲」のおかげだとひとつづつに知らせてよこした。

サルデーニャでもそれ以外のイタリアでも状況はたしかに混沌としていた。議会は相変わらずいつものように行政について議論していた。またそれ以外には議論の対象はなかった。まったくのところ政治闘争を明確にするには、瀕死の議会の亡霊よりもごまかしのない独裁の方が望ましかった。それは力で成り立っている国家だった。であればなぜ憲法にもとづく妥協という幻想を国民に与えるのか？ わたしは下院に辞表を提出した。このときも下院はそれを拒否しようとしたが、わたしはそれ以後議会には足を踏み入れることはなかった。

事業家、「良識」を持つ人々、平和と秩序を愛する人々、確立された権力を好む人々の全員が、第二期のファシズムの周囲に結集した。しかし大衆は相変わらずファシズムに敵対的なままだった。新しい方向性は大衆をまったく惹きつけなかった。ファシストの祝典は、以前と同じように、人影もまばらだった。

ガンドルフォ将軍は植民地義勇軍の創設によってサルデーニャ島に活気を与えることを考えた。この島には戦闘的な伝統が存在した。将軍はそうした郷土愛をかき立てることを狙った。すぐにサルデーニャの植民地義勇軍は全国的な計画に組み込まれた。それは植民地における戦争のために準備された最初のファシスト軍事組織となった。そのためにこの組織は外国でもイタリアでも多くの論議を呼んだ。サルデーニャ島にとってこれはまことに大きな事件だった。

## 第一八章

王国警備隊は解体された。その理由はファシズムに対する忠誠心が不足している、というものだった。その代わりに国防義勇軍が創設された。国防義勇軍はファシスト党の軍隊だった。1922年12月に設置されて以来、それは《ドゥーチェ》の指揮下に置かれた。国防義勇軍は志願制であり、まさにそのために、たっぷり給料が支払われていた。懲罰遠征に参加したファシスト行動隊員たちが義勇軍の骨格となった。その組織は古代ローマの軍隊にヒントを得ていた。すなわち、部隊は軍団、歩兵大隊、百人隊、小部隊と呼ばれた。兵卒も重歩兵、トリアーリなどローマ風の名称で呼ばれた。翼を広げたローマ帝国の鷲が旗印だった。

植民地義勇軍は国防義勇軍の特別な部隊だった。サルデーニャ島にガンドルフォ将軍が設立しようとしたのはこの特殊部隊だった。

将軍は情熱のこもった呼びかけを行ったが、義勇兵の集まり方はきわめて鈍かった。志願者の数は一ヶ月で30人だった。これでは足りないのが明らかだった。二度目の呼びかけでは給料が増額された。ひとりあたり一日16リラの給料に加えて食事と制服が支給された。駆けつけた志願者は予定数を越え、数千人が職にありつけなかった。ファシストの新聞はサルデーニャ島でのファシズムの急速な成功を自慢する論説を掲載した。

新しい部隊は第一軍団という名称を採用した。事実それがイタリアで最初に作られたものだった。短期間のうちに装備や武器を与えられた部隊は、荘重な形式にもとづいて誓約を行うために集められた。カリアリの守備隊の全員がこの儀式に立ち会った。軍団は短剣を鞘から抜いてそれを三度さし上げて誓約を行った。古代ローマ人たちもこれとほとんど同じ形で誓いを立てていたとされる。

セレモニーが終わると、大隊ごとに市内を行進した。そのときわたしはカリアリにいて、窓からその行進を見た。隊列の中に何人かの知人の姿を認めた。数多くの復員兵士が加わっていた。百人隊長のひとりには戦争中わたしの部下の伍長だった。もうひとりの百人隊長はわたしの行きつけの床屋だった。だが大半の将校は戦時に将校をつとめた人々だった。

軍団を指揮する軍団長はかつての大佐で、わたしもよく知っている人物だった。わたしが少尉だった頃彼は上官の大尉だった。終戦時には連隊を指揮するところまで昇進していた。年齢制限によって退役していたが、政治活動にはかかわりを持っていなかった。彼は善良な

男だった。つねにリベラルな意見を口にしていた彼がファシストになり、軍団長になったことは多くの人々には奇妙に感じられた。

「わたしは植民地のファシストであって、イタリアではそうではない」と大佐は答えていた。「アラビア人は政治には関心を持たない。」

最初の訓練期間を終えると、軍団はすぐにリビアへの赴任命令を受けた。軍団長は軍事的準備を整えるために出発の延期を求めたが、かなえられなかった。軍団はカリアリの港から出発することになった。

軍団が乗船する日はまるでお祭りだった。全島のファッショの代表者たちがカリアリに集められた。波止場には旅立つ兵士たちの妻や母・妹が詰めかけ、少なからぬ涙が流された。ラッパと太鼓が交互に演奏を続けた。ガンドルフォ将軍は帝国の鷲の紋章に口づけ、ユグルタ〔紀元前二世紀にローマに抵抗したヌミディアの王〕とカルタゴの敗北を引き合いに出して演説を行った。

「アフリカは誰のものか？」最後に軍団長が操舵室から叫んだ。

「われわれのものだ！」軍団は短剣を突き上げながら答えた。

「われわれのものだ！」波止場に押しかけたファシストの群衆も答えた。

軍団が出発した後、カリアリでは植民地キャンペーンが行われた。帝政期のアフリカが大きな看板に再現されて、劇場やカフェ、役所などに展示された。ナイル川からヘラクレスの柱〔ジブラルタル〕までの地中海沿岸全域にラテン系の人々が再び配置された。アレキサンドリア、キレネ、レプティス・マグナなどの都市が城壁とともにそこに描かれた。カルタゴの位置には大カトーを記念するために本物のイチジクが置かれた〔プルタルコス『列伝』にはこうある。「カトーは元老院でトガをたくし上げてリビュアでできたイチジクの実を故意に落とし、人々がその大きくて立派なのに驚くを見て、これのできる土地はローマから海路三日の距離に過ぎないと述べたといわれる。更に激しかったのは、何事によらず意見を開陳した場合に必ず「カルタゴは消滅すべきだと思う」と言い添えた点である。〕。その他に一連の講演会が開かれ、非常に興味深い映写会ももたれた。サルデーニャは全島が陶酔状態にあった。ガンドルフォ将軍はいつきも休まずに活動を続けた。

そしてその後の二ヶ月間、軍団に関するニュースはまったくなかった。そしてぼんやりとした情報が全島に広がり始めた。最初それは悪意の込められた噂話と思われた。しかし正確なニュースはほどなくして伝わってきた。軍団が敵前で反乱を起こしたというのだ。ガンドルフォ将軍は病いに倒れた。

起きたのは次のようなことだった。アラビアの部族たちがクフラのオアシスを襲撃した。植民地総督はその報復を行う名誉をファシスト軍団に与えることを望んだ。彼はできるだけ早い段階で第一軍団に実戦の機会を与えるようにローマから指示されていた。それはニュースがあっという間に広がって、イタリアの若者たちを熱狂させ、サルデーニャでファシズムの信用を増大させることが狙いだった。内戦が行われて以後、本物の紛れもない戦勝が求められていた。軍団長は自分の軍団の軍事的準備に関してちょっとした異議を申し立てたが、攻撃命令という大いなる名誉を考え、それ以上あえて主張することは避けた。軍団は敵陣への近接行動を開始する命令を受けた。アラブ人たちは戦闘命令にしたがって散開し、戦意も旺盛に待ち受けていた。ファシストが野戦で武装した敵と戦うのはこれが初めてだった。期

待は大きかった。

ところが驚きも大きかった。軍団は密集隊形を保ったまま、移動を拒んだ。

駆けつける将校たちに対して、義勇兵たちは遅延している給料の支払いを求めた。募集時の契約が守られておらず、一日7リラではなくて16リラの支払いを求める権利がある、と彼らは主張した。事実彼らが受け取ったのは一日わずか7リラで、糧食も普通食だった。

軍団長はそうした危険な行為をやめるように嘆願したが、彼の努力は報いられなかった。義勇兵たちは給料の支払いをなおも要求した。努力が無駄であることを見てとると、軍団長は反乱の首謀者たちの逮捕を命じた。大混戦が発生した。武器を手にした義勇兵たちは命令の執行を阻止した。状況は重大だった。命令が軍隊式に実行されるためには、軍の規律が厳しく守られることが必要だった。それがなければ、軍隊と民間の間に大きな違いはなくなってしまう。

軍団長は時間稼ぎを試みたが、とうとう最後には軍司令部に通報せざるを得なくなった。正規軍部隊が緊急に呼び集められた。歩兵、騎兵、砲兵の部隊だった。反乱兵たちは包囲され、砲撃の目標とされた。ことここにたってようやく、彼らは出発することを決意した。軍団と距離を置いて正規軍部隊もついていった。義勇兵たちは進軍をしたが、彼らの態度はアラブ人よりも自国の兵士たちの間に恐怖を呼び起こした。

このような状況で華々しい戦闘を期待するのは軽率というものだ。司令部はこの作戦をあきらめる必要があると判断し、その日のうちに軍団を元の宿営地に戻した。

数日後軍団は解体された。百人隊はひとつひとつバラバラにされて、正規軍の他の部隊に編入された。軍団も歩兵大隊も消滅してしまった。残っているのはバラバラの百人隊だけだった。団結の精神は失われた。部隊の士気は致命的な打撃を受けた。それ以上の抵抗は不可能だった。義勇兵の全員が屈服し、給料の増額も糧食の改善もないことを受け入れた。その後百人隊のいくつかは困難な戦闘に投入された。だがこうして作られた軍団はもはや組織的統一性を持たず、ファシズムを代表するものではなかった。それは政治的にはもう価値のないものだった。さらに義勇兵たちは兵役からの免除を要請した。募兵時の条件が守られていないことがその理由だった。

政府は軍団を新たに再編成してサルデーニャに戻すことを命じた。

軍団が帰還するというニュースはあっという間に広がった。サルデーニャではすべての人が軍団を一目でも見ようとした。サルデーニャ島では第一次大戦後、「白い鹿」のカリアリ上陸の知らせが広がったとき以来、これほど人々の興味をかき立てたことはなかった。「白い鹿」とはアメリカ合衆国とカナダの国境地帯の五大湖周辺を長く支配していたインディアンの酋長の子孫だった。彼は羽根飾りとパイプを持って、インディアンの酋長の衣装を着て、イタリアにやってきた。ファシズムに対する強い共感を示し、祖国に戻ったら自分の部族をファシストに組織して黒シャツを着せ、ワシントンの子孫たちの退屈な民主主義にうんざりしているインディアンたちをもっと戦闘的にすると言明した。ファシズム全体及び《ドゥーチェ》自身が彼の熱狂ぶりに無関心ではいられず、数々の名誉を彼に与えた。フィレンツェでは名誉執政官に任命され、黒シャツ姿で数多くのファシストの儀式に参加するように招待された。

劇場では熱狂的な歓迎を受け、トスカーナの貴族の少なからぬ女性たちが彼にのぼせ上が

った。このインディアンはまことに美しかった。「白い鹿」はサルデーニャにも来るはずだった。彼がどれほど待ち望まれていたかは、来訪の一ヶ月前から、出席する予定の劇場の席や通過するはずの道路に面した窓の席が売りに出されていたことからわかる。不幸なことに「鹿」はイタリア中の広場をめぐったやたらに駆け回った。彼は自分自身に自信を持ちすぎている。

司法警察が彼に関心を抱き、ある凱旋門を通過しているときに彼を逮捕した。彼はオランダ出身の国際的詐欺師であり、ヨーロッパの数カ国の警察に追われていたことが判明した。計画されていたサルデーニャへの彼の来訪は実現しなかった。

カリアリの町は今か今かと軍団の上陸を待っていた。町のすべての人々が上陸の場面を見ようと波止場に詰めかけた。

軍団はちょっとした混乱の中で上陸した。海に落ちた者もいた。義勇兵たちは際だって勇壮な様子ではなかった。出発したときと同じ制服を着ていた。その様子はあまりにも惨めだった。服はずたずたに引き裂け、つぎがあたり、ほこりだらけだった。多くの者が腕や肩にアフリカの小さな猿を乗せていた。たくましい兵士たちは長大な新月刀を体の脇につけていた。

上陸作戦には少し時間がかかり、軍団は平穏な状態ではなくなった。規律違反は避けられなかった。義勇兵の大半が波止場に寝そべったり、近くのカフェに流れ込み横柄な口調で命令した。「ガンドルフォ將軍につけといてくれ！」と叫んだ。ラッパが何度も集合を呼びかけた。義勇兵たちは聞いていなかった。平然と《タム・タム》の伴奏付きでアラビアのメロディーを歌ったり、戦争の思い出話を大声で語り続けた。数時間かかってようやく将校と下士官たちが行方不明者たちを隊列に戻すことができた。これで行進を始めることができた。先頭には帝国の鷲の旗が、しんがりには輜重隊が並んだ。

駐屯部隊の司令部は音楽を添えることを考えた。連隊の軍楽隊が礼装で参加した。外見の豪華さによって市民の目から内部の欠点を覆い隠さねばならなかったのだ。汚れた制服は家で洗濯された。だが軍団は軍楽をひどく嫌っていた。軍楽隊が非常によく知られていた行進曲《カエサルの帰還》を演奏し始めた。義勇兵たちは叫び声をあげて音楽をさえぎり、演奏を妨害した。

「給料を払え！ 運配の給料をよこせ！」声を合わせて叫んだ。住民は彼らの行進に詰めかけた。義勇兵たちは自分たちが約束された金を受け取っていないこと、だまされ裏切られたことを、その場にやってきた人々にうちとけて説明した。

大通りで隊列は我慢できない様子を示し始めた。兵士たちはパレードの歩調で行進することにうんざりしていた。無秩序が隊列の中に忍び込んだ。駆けつけたたくさんの少年たちが猿たちをからかった。混乱はこれが原因でさらに拡大した。群集の中で猿たちの何匹かは革ひもを切って人々の肩や頭に飛び乗った。女たちは恐怖に駆られて悲鳴をあげ、手や傘を振り回した。さらにたくさんの猿たちが逃げ出した。犬たちは激しく吠えながら猿を追いかけた。そんな動物を犬たちはそれまで見たことがなかった。犬に脅えた猿たちはものすごい速さでアクロバットを見せながら、街灯のてっぺんや木の上、家々のバルコニーなどに逃げた。こうなるとすぐに猿たちこそがこの比類なき見世物の主たるアトラクションとなった。猿たちはあちらこちらと駆け回った。その場の全員が叫んでいた。義勇兵たちも猿たちの行動の

陰で散り散りになってしまった。すっかり警戒心を強めた猿たちをなだめるのにずいぶん長い時間がかかった。正しいやり方で接する必要があった。軍団はもう行進をしなかった。また行進の軍事的狙いはもはや完全に粉碎されてしまった。最後には猿たちも屈して、隊列に戻った。

将校たちは軍団を兵舎までたどり着かせるのに多大な努力をはらった。

今までキャリア市民たちはこれほど記憶に残るような行進に立ち会ったことがなかった。この事件はひとつの時代を画するものとなった。特に子どもたちにとってはそうだった。彼らはひどく喜んだ。それ以来母親たちは子供をおとなしくさせるときはこう言ったものだった。

「いい子にしていたら、ファシスト軍団を見て連れて行ってあげるからね。」

こうして国防義勇軍はサルデーニャでは人気者になり始めた。

その翌日軍団は解散させられた。帝国の鷲の軍旗は県庁舎の物置にかたづけられた。最も反抗的だった義勇兵たちは軍事法廷に委ねられた。その他の連中は、ほとんど全員が一般の国防義勇軍に編入されたが、国内勤務を規律正しく行うことを約束した。そしてその義務を果たすのは容易だった。なぜなら国内の敵である反体制派は、砂漠もオアシスも武器も持っていなかったからだ。彼らとの戦闘においては規律も犠牲も小さくて済んだ。

## 第一九章

1923年の後半に話を移すことにしよう。ファシズムは権力を邪魔されることなく保持していたが、つねに合意を求めている。哲学者ジェンティーレは「具体的一般概念」の解釈の中でこう説明していた。「合意は、自発的なものであっても、強制されたものでも、現実である。」こうしてすべての者が棍棒を手にして「現実」を求めて突き進んだ。そして国家の力がそのための道を切り開いた。反対派は新聞によってでしか抵抗できなかった。ファシスト系の新聞は相変わらず売れていなかった。誰もそんなものを読みたがらなかったからだ。反ファシストたちは公私を問わず組織の管理職から追放されていった。警察はその姿を見失うことなく、ファシスト行動隊員たちに彼らの存在を教えた。行動隊の方も同じように警察に反ファシストの存在を知らせた。相互に仕事の便宜をはかりあっていた。国家がその費用をもち、必要な措置をとった。一般の警察とファシスト義勇軍、ファシスト行動隊員たちだけでは十分ではなかった。科学的な正確さで訓練されたもうひとつの特別な警察がすぐに創設された。だがファシズムはまだ自らに確固たるものを感じていなかった。そのため反対派の全員に力の重圧を感じさせる必要があった。作戦は水平的及び垂直的戦略にもとづいて速やかに遂行された。その時点でカトリック派の人々は異議を唱え始め、ローマ教皇も彼らを支持していた。カトリック派の国会議員は四月以来内閣から離れてしまっていた。ドン・ストゥルツォ [ルイージ・ストゥルツォ (1871~1959)。聖職者からカトリック民主運動のリーダーとなり、人民党を作り上げた] は亡命していた。反対派は減るよりもむしろ増えつつあった。ムッソリーニの側にとどまったのはファシストと正統派自由主義者たちだけだった。正統派自由主義者たちにとって自由という概念は限界がなかった。実質的に自由は存在するか、しないかのどちらかだった。そしてもし存在するのであれば、絶対主義に奉仕するものであっても、自由

はその存在を失うことがない。弁証法の厳密な規程によれば、圧制も自由を刺激するものとしてしか考えられない。「ローマ進軍」までは反ファシストだった哲学者で下院議員のオラーノは、この輝かしい概念に哲学的な形式を与えた。

反対派の新聞はファシズムが明らかな少数派だと主張した。ファシストたちは反対派こそ少数派だと反論した。どちらが正しいのか？ それを決めるのは主権者たる人民だった。

しかし人民は善導されねばならない。人民はつねに正しい。しかしうまく自分の意見を表明できない傾向がある。したがってその反応を調整する必要がある。ムッソリーニは選挙法の改正を要求した。新しい法案はファシスト党が議席の多数を獲得できるように作成された [提案者の名前をとってアチェルボ法と呼ばれるこの選挙法では、相対的第一党に全議席の三分の二を与えるものだった]。下院はこの法案に対して敵対的だった。頑固なまでに敵対的だった。絶対に屈することはない、と思った。屈辱はもうたくさんだ。必要とあれば、血の最後の一滴まで戦うことができるのを見せてやろう。決意は鉄のように堅かった。玉砕することはあっても、屈服することはない。反対派の議員たちはひとりひとりお互いに意見を交換しあった。事前に票の計算が行われた。たとえ差はわずかでも過半数は確保できた。今度は団結を保つ必要がある。生きるか死ぬかの問題である。

わたしは辞表が拒否されて以来、下院には一步も足を踏み入れていなかった。しかし法制上わたしは依然として下院議員だった。わたしのところに反対派の代表がやってきて、たった一票の差で自分たちの勝利が失われるかもしれない、と説明した。そうした敵前逃亡をわたしが犯すべきなのか？ 同志たちもわたしに懇願した。「戦いに加われ！」わたしは簡単に説得に応じた。他にはなすべきことはない。反対票を投じようではないか。今ではこんな戦いしかできない。

両陣営の対立は熱気を帯びてきた。ムッソリーニは公的な声明の中で、法案が否決されれば下院を解散して再度クーデタを行う、と通告した。この通告が少しは動揺をもたらしたが、最初の衝撃を乗り越えると、決意をさらに強める結果となった。ジョリッティ議員は友人たちに対して、祖国のために賢明であらんとすれば慎重な選択が必要だ、と述べた。

「山羊のごとく生きるより、獅子のごとく死ぬ方がましだ」世俗主義およびカトリック民主派の人々は答えて、いかなる犠牲も払う姿勢を見せた。

「かまいはしない」ファシストたちは言っていた。「第二のローマ進軍をするまでのことだ。」

「もう一度ローマ進軍を？」

「必要ならローマを炎上させることも！」

「そうだ、ローマを空っぽにしまえ！」

「ナポレオンはモスクワで何を見いだしたのか？」

「山ほどの灰さ。」

下院の開会前夜はまるで野戦の前夜のようなようだった。ローマは「黒シャツ」たちでいっぱいだった。彼らは武装してトラックに乗って脅迫をまき散らしていた。

「裏切り者たちに死を！」

「死を！ 死を！」

何人かの代議士が路上で侮辱された。状況はきわめて緊迫していた。疑惑が芽生え始めて

いた。もっと慎重にすべきではないのか？ ジョリッティの言い分にも道理があるのでは？ そうだ、おそらく彼が正しい。なぜ非妥協的な姿勢を示さなければならないのか？ 自分の利益ではなくて国の利益を考えるべきではないのか？ 国の代表である国会議員たちが虐殺されるようなら、いったい誰が国の利益を守るのか？

いよいよ採決の日が来た。審議は厳粛に行われた。歴史的な審議、と新聞は書いた。全議員が会議場に出席していた。傍聴席では「黒シャツ」たちがこれ見よがしにピストルをもてあそんでいた。その中のひょうきんな連中は短剣を抜いて、落ち着いた様子で爪を削っていた。

代議士たちは見ないふりをしていた。

「なんて行儀の悪い奴らだ！」わたしの右側の同僚がささやいた。

「あいつらは撃ってくると思うかね？」ひどく細い声で左側の同僚議員が尋ねた。

「きみは武器を持っているか？」わたしは彼に尋ねた。

「気でも狂ったのか？」彼は答えた。

「いいや」わたしは言った。

「キャラメル食べるかい？」

「うん、ありがとう。」

しかしこんな前置きで読者の気をもませる必要もあるまい。要点をはっきり述べよう。

投票総数450票。賛成303票。反対140票。棄権7票。世俗主義およびカトリック民主派はほぼ全員が賛成に回った。

ファシストたちは投票の結果を歓呼の声で迎えた。その騒ぎは30分以上続いた。ムッソリーニは子どものように笑いながら議場を出ていった。

わたしがモンテチトーリオ広場〔下院の議場はローマの中心のモンテチトーリオ宮殿にあり、正面がモンテチトーリオ広場、裏がパルラメント広場になっている〕に出ていった最初の議員だった。広場はそこに通じる道まで群衆であふれていた。コロンナ広場もいっぱいだった。群衆は心配そうに待っていた。わたしが階段の上に現れたことで投票が行われたことがわかった。全員が黙ってわたしを見つめていた。わたしは言った。

「法案は過半数を大きく上回る賛成多数で可決された。」

東洋の君主国家で軍事的敗北を主君に伝える任務を帯びた大臣がその悲しい義務を果たすよりも自殺を選ぶことに、わたしはもう驚かなくなった。それはどうなるかを予期し、王が激怒して与える恥辱や拷問を逃れることが問題なのだ。

たしかにわたしはモンテチトーリオ広場の側から外へ出るという軽率な行為を犯してしまった。そしてさらに軽率なことに、何のコメントもつけずに投票結果を伝えてしまった。「法案は可決された」という代わりに、こう宣言すべきだったのだ。「市民たちよ、わたしは反対票を投じた。それにもかかわらず法案は可決された、ときみたちに告げねばならない。」そしてこれだけを述べて、下院の中に戻るのが賢明なやり方だった。それとは逆にわたしは、痛ましいニュースをはっきり述べると、広場の方に階段を降りていった。

群衆の中から軽蔑に満ちた叫び声があがった。すると洪水のように罵声が押し寄せてきた。

フィリアッキ  
「卑怯者！」

トラディートーリ  
「裏切り者！」

「おまえたちは国を売ったんだ！」

「給料を失うのが怖かったんだろう！」

「辞職せよ！ 辞職せよ！」

「死んでしまえ！」

わたしが広場にいた唯一の議会の代表だったので、すべての憤激はわたしに向けられた。自分の名前を名乗ったり、反対票を投じたことを説明したりすることさえ頭に浮かばなかった。たぶん時間的余裕がなかった。だが自分が陥った状況の奇妙さのために、わたしの思考能力は低下していた。その日のわたしにはあらゆることが予想できたが、自分と同じ政治的信念を持つ仲間たちから攻撃されることは考えていなかった。帽子とネクタイはなくしてしまっただが、シャツ一枚にならないために上着だけはとられないように守ろうと努力していた。だがその間もわたしは考えていた。下院議長は運が良かった。だが最初に外に出るのがどうして彼ではなかったんだろう？ 実際のところ会議中の彼の行動は特別な取り扱いに値するものだった。

その場を守備していた擲弾兵の一团がすぐに介入しなければ、わたしはおそらくバラバラにされていたことだろう。そこへ警察がやってきて、秩序は回復された。

下院はそれでもまだ数ヶ月余命を保った。

1924年の初頭に下院は解散され、総選挙が実施された。

選挙法の改正によってファシズムは下院での過半数の獲得を確実にしていた。それに加えて、イタリアでは政権を握っていて選挙で敗れた政党の例はごくわずかしかなかった。当然のことと認められていた法的慣行によって、県知事たちはつねに主たる選挙運動員だった。ジョリッティがこの領域では敗北を知らない傭兵隊長であるという評判を得ていた[ジョリッティの巧妙かつ徹底的な選挙干渉に対して、ガエターノ・サルヴェーミニはジョリッティを「犯罪大臣 ministro di malavita」と呼んだ]。

反対派は二つの陣営に分かれていた。

「選挙には棄権すべきだ」と片方が主張していた。

「選挙に参加すべきだ」ともう一方が主張していた。

それぞれの意見にはそれなりの論拠があった。だが多くの人々にとって棄権はたんに勇気が欠けていることのように見えた。そうしたことから選挙派が容易に多数派となった。

選挙は4月6日に行われた。わたしは多数派の決定を受け入れて、再びサルデーニャから立候補した。

集会で話ができた候補者はわずかだった。多くの候補者が自分の選挙区から閉め出された。そこに入ることは死を意味した。それ以外の候補者たちも公衆の前に現れることを断念せねばならなかった。それは選挙民を危険にさらさないためだった。ファシズムは報復の脅しをちらつかせ、疑わしい有権者の投票をチェックできるように特別な監視体制を組織した。再びテロルの波が国中を襲った。社会党の候補者ピッチーニは、選挙区を放棄するようと言う脅迫に屈しようとしなかったために、殺害された。

サルデーニャでも選挙はほとんど同じようなやり方で行われた。第一期のファシズムは、それ以上の報復を恐れて、第二期のファシズムと和解し、両者の統一が達成された。

すでにファシズムに移行していたわたしの友人たちの何人かは、政府側の候補者となって

いた。カーオ・ディ・サン・マルコ伯爵もその中のひとりで、武装グループの司令官として彼自らが威嚇のための襲撃に加わっていた。わたしにしゃべらせないようにあらゆる手段で妨害するべしという命令をすべてのファシヨ支部が受け取っていた。しかしわたしのグループの周囲には強力な民衆の運動が生まれていて、わたしは暴力を受けることなく話すことができた。唯一島の中央部の農村マズッラスでだけ、わたしは演説を妨害された。わたしが到着する前に住民たちは家の中に閉じこもっているようにという命令を受けていて、わたしが目にしたのは武装したファシストたちだけだった。そして彼らはわたしが村に入るのを妨げた。斜めに三色の飾り帯をつけた執政官はわたしに向かってこんな風に話しかけた。

「代議士先生！ わたしは自由を支持する者で、自由を愛さない者は生きる資格はありません。しかし自由にもいろいろあって、それを区別する必要があります。すべての者が祖国に仕える自由を保持していますが、祖国を裏切る自由はありません。マケドニアのフィリップス王が……」

この執政官がかつては小学校教師で、何年か古典教育を受けた経験があるということ前置きとしていっておかねばならない。

「マケドニアのフィリップス王がギリシアの自由を侵害したとき、デモステネスはかく行動したと……」

「執政官どの」わたしは彼の言葉をさえぎった。「できればわれわれの祖国の歴史のエピソードを話していただければ……」

儀式は決して簡素なものではなかった。執政官はすべてをきちんと準備していた。彼はテーブルの上に乗すすぐ立って話した。落ちないように、ふたりのファシストが彼の両脚を支えていた。執政官は文書を読み上げることもした。そういうわけで、わたしがイタリアの歴史に触れたらどうかと示唆すると、彼は読み上げるのを中断してわたしを怒った目で見つめると叫んだ。

「おとなしくしてたまえ。」

そしてわたしを指差して部下たちに命じた。

「法の名において、彼を逮捕せよ！」

わたしが引き起こしたこの混乱した状況を抜け出せたのは、戦争中わたしの大隊の下士官だったこの土地のファシストのひとりが間に入ってくれたおかげだった。彼がわたしの護衛になってくれて、わたしはそれ以上の紛糾なしにその場を離れることができた。

キャリアではあるファシストのグループが、わたしの抹殺が国家にとって必要だとひとりの狂信者に信じこませることに成功した。この男はわたしの家の前で狩猟用の大きなナイフで武装して待っていた。しかし彼は計画を準備する過程での興奮が激しく、すぐに気づかれてしまった。ふたりの若者がナイフを取り上げて彼を近くファシスト義勇軍の兵舎に連れていった。指揮官は急いで彼を釈放すると、ふたりの通報者を兵舎に拘束した。ふたりの抗議もむなしく、結局名誉毀損罪の被告として法廷に引き出されてしまった。

わたし個人はそれ以外には妨害行為を経験しなかったが、わたしの同志たちは投票日に自由に行動するために非常に慎重に行動しなければならなかった。わたしの家族と折半小作契約を結んでいた農民たちの何人かは、投票の前日に逮捕された。彼らを逮捕することで、わたしの政治的無能力宣伝しようとしたのだ。

サッサリの町の候補者ベルリングエル弁護士は公的な集会の間にファシストたちに襲撃され、ナイフで刺された。友人たちが飛び込んできてくれたおかげで彼は身を守ることができて、軽い傷を負っただけですんだ。

政府側の候補者リストは400万以上の票を獲得してイタリア全土で勝利した。反対派も300万票を得た。わたしも再選された。

新しい下院の開会は5月に行われた。社会党の代表であるジャコモ・マッテオッティ議員が本会議で選挙中の暴力を厳しく批判し、選挙の無効を主張した。ファシスト議員たちは猛烈に反発した。しばらくは議論が会議場の中で悲劇的な結末をたどるのではないかと思えた。マッテオッティ議員は多数派の脅迫するような叫び声の中で演説を終えた。自分の席に戻ると彼は冗談めかして同僚議員たちにこう言った。

「さて、ぼくは自分の演説をした。今度はきみたちがぼくのために弔辞を準備する番だ。」

ファシスト系の新聞は下院での審議について論評する中で、マッテオッティ議員に対してファシスト議員たちが示した寛容さを許しがたいと非難していた。その夜ムッソリーニは、暴力のスペシャリストである取り巻き連中に対してこう語った。

「おまえたちが卑怯者でないのなら、あんな演説をこれから誰にもさせてはならない。」

ヘンリー二世は、トマス・ベケットが彼の寵臣たちに対して破門状を発したとき、忠実な廷臣たちに怒りをこんな風にもちまけた。「余の食卓でたらふく食わせやっているこの卑しいもべたちのたったひとりでも、余に立ち向かおうとする者に、余の代わりとなって恨みを晴らそうとはしないのか？」歴史家の教えるところによれば、ただちに四人の騎士が出発した。彼らは大司教のもとに到着すると、カンタベリー大聖堂でミサを行っている最中に彼を惨殺したのだ。

マッテオッティ議員に対してローマの真ん中で放たれた騎士は五人だった。

マキアヴェッリは『君主論』でこう言っている。「新たに君主の地位を得ようとする者は、敵を見定め、味方を獲得し、実力あるいは欺瞞によって敵を打ち破り、民衆から愛されて恐れられ、兵士たちから敬意と服従を捧げられ、危害を加える可能性のある者たちを抹殺し、古い秩序を新しいやり方で革新しなくてはならない。……そうした行動で、この人物以上に見事な例はない。」

「この人物」とはチェーザレ・ボルジアのことだ。

ムッソリーニはこの直前に、ポローニャ大学の名誉学位のテーマとして『君主論』を選んでいた。

## 第二〇章

6月10日マッテオッティ議員は下院に向かう途中で何者かに拉致され、カンバーニャ・ローマーナで殺された。これは不穏な議会に対する帝国風の教訓だった。そしてこのことは今では世界中に知れ渡っている。

わたしはローマにいた。同僚たちと同じように、わたしもそのニュースを突然知らされた。正直に言えば、わたしは驚かなかった。すでにイタリアのあらゆる場所で起きていたことから考えて、ローマでの事件はまったく当たり前のことのように思えた。今やそれが議会の番

になったというだけのことだった。だが国内での反響はきわめて大きかった。

暗殺を実行したファシスト行動隊を指揮していたのはアメリーゴ・ドゥミーニだった。わたしは彼の評判は聞いていた。彼はその6ヶ月前に新聞記者のジャンニーニと決闘を行った。ジャンニーニは社会党員で、ローマのある劇場でその前に彼に襲撃されていた。ジャンニーニは非常に優れたフェンシング選手で、ドゥミーニは決闘の最中にパニックに陥って逃亡した。ファシスト陣営では彼は大胆不敵な人物として通っていた。彼は非常に有名で、政治的暗殺者たちの間では絶対的な威信を保持していた。彼はこんな風な自己紹介を好んだ。「ドゥミーニ、9人の殺人者！」彼の最も輝かしい行動は、カッラーラの公衆の面前で行われた。赤いカーネーションを持っていたという理由で、彼はある少女に平手打ちを食らわせた。その場にいた少女の母親と兄が抗議を行った。彼はその返答としてピストルでふたりを射殺した。その当時彼はローマに住んでいて、総理府出版局につとめていた。かろうじて読み書きができる程度だったにもかかわらず、彼は筆が立つ人物と見なされていた。正規の職員として高給を得て、一等車で旅行し、常勤ならびに非常勤の専任の秘書たちに取り囲まれていた。

彼と行動をとともにした四人は、評判は彼ほどではないが、かなり以前からの仲間だった。彼らはその頃地方からローマにやってくるが、表向きは出版局でのドゥミーニの事務を手伝うことが名目だった。

発生直後の数日間、事件は謎に包まれていて、行方不明のマッテオッティ議員がどのような運命をたどったかはわからなかった。ムッソリーニは6月12日に下院で声明を発表した。

多くの人々は《ドゥーチェ》が非常に当惑した様子で語るものと考えていた。この日の会議の細かな点と首相が下院に対してどのような態度を示したかをわたしはよく覚えている。彼はまったくうろたえていなかった。「マッテオッティ議員が議会の彼の席に早く戻ることをわたしは祈るものである」と言いながらムッソリーニは左派の席をにらみつけた。彼の顔はこう言っていた。「これでひとりだ！ よく覚えておくがいい。まだ始まったばかりだ」と。こうした威嚇的な表情のせいで、共和党議員エウジェーニオ・キエーザが立ち上がって彼を指差しながら叫んだ。「政府が共犯者だ！」

この日のムッソリーニは自分自身の立場に完全に自信を持っていた。ファシスト議員たちは最高に上機嫌だった。ファシスト行動隊員たちはうれしさに有頂天になっており、ファリナッチは狂喜していた。その直後から事態は急変し始めた。犯罪にかかわったファシスト高官たちの名前が次々に明るみに出てきたのだ。総理府出版局長チェーザレ・ロッシ。党管理部門総書記マリネッリ。「イル・コリエーレ・デリ・イタリアーニ」紙編集長フィリップペリ。そして最後に警視總監デ・ポーノ。デ・ポーノはすぐにドゥミーニと相談し、犯罪の証拠隠滅を指示した。このように首相は直接この事件にかかわっていたのだ。

あらゆる階層の国民の間でこれほど深い衝撃が走ったことはなかった。反対派の下院議員たちは議場を放棄し、すべての責任者に対する司法の制裁が加えられるまで議会に戻らないことを宣言した。こうして議会からの分離者たちが生まれ、彼らは「アヴェンティーノ」と呼ばれることになる [この名前は古代ローマで帰属の横暴に抗議する庶民がアヴェンティーノ (アヴェンティヌス) の丘にこもったことから由来する]。

世論の中にはすぐに二つの潮流が生まれた。片方、すなわち多数派は《ドゥーチェ》が直接事件を命令したものと考えた。もう一方、こちらには多くのファシストがいた、は個人の

イニシアティブで行われた行動が不運な結末となった、と考えた。わたしは前者の立場をとった。それでも二つの潮流ともに首相が政治的に責任がある点では一致していた。ファシストの多数派は方向性を失い、どう考えていいのかわからなくなった。すべてが正しい行為であり、これこそがファシズム全体が通過しなくてはならない経路であるとしてためらいもなく支持し続けたのは、ファシストの一部に過ぎなかった。

当時のローマは激しい動揺の中にあった。全員が内閣の辞職を求めている。家でも、オフィスでも、工場でも、広場でも、街路でもそれ以外のことを話している者はいなかった。反対派の指導者たちは道を歩いても喝采を受けた。ファシストたちはどこでも罵声や口笛で迎えられた。多くの者がファシスト党のバッジをはずし、判決がムッソリーニの潔白を明らかにしたときに限ってそれをもう一度つけると宣言した。侮辱や危険から逃れるためにバッジをはずす者たちもいた。黒シャツ姿で公の席に現れる者はひとりもいなくなった。ファシスト議員の何人かは下院に行くときにだけ制服を着て、家に戻るとすぐに硬いカラーの普通のシャツに着替えていた。議会の廊下ではファシスト議員たちが反対派の人々に接近して暴力や専横に反対の意見を開陳していた。

第一期のファシストであるテルツァーギ議員は《ドゥーチェ》の命まで要求して走り回っていた。これも下院議員になっていたカーオ・ディ・サン・マルコ伯爵は、かなり以前から会っていなかったが、次のようなことを伝えるためにわたしに会いに来た。それは、ローマとイタリア半島でどのような事態が起きても、サルデーニャでの危機を平和的に解決するためにわれわれが一致してはならない、ということだった。6月12日にムッソリーニが下院で演説したときに自分が笑いながら自信満々な態度を示したことを彼はすっかり忘れてしまっていた。

「きみは恥ずかしくないのか？」わたしは尋ねた。「今になってわたしの前に現れるなんて。」

「いいや」彼は答えた。「なぜぼくが恥ずかしく思わなきゃいけないんだ？」

わたしの友人であるローマの弁護士（ファシストで行動隊員だったが、それまで2年以上も会ったことがなかった）が絶望した様子でわたしに会いに来た。何日か泊めて欲しいと言うのだ。彼の住む地区の反ファシストたちが自分の家を襲うことを恐れていたのだ。

「なぜぼくのところに来た？」私は尋ねた。「きみの党の仲間のところではなくて？」

「ぼくの党の仲間だって！」彼は言った。「党の仲間たちもぼくと同じ状況だよ。ひとりも見つけられないんだ。ローマを離れた奴もいるし、住むところを変えた奴も多い。今はとても危ないんだ。」

「ああ、きみだって暴力を大いに支持していたじゃないか。なぜ暴力を振るい続けられないんだ？ 今こそそのときだろう。」私は言った。

「ムッソリーニはわれわれを裏切った」彼は答えた。

「だったら彼を見捨てることできみたちはムッソリーニを裏切っているじゃないか。」

「ムッソリーニの方がわれわれを裏切ったんだ」彼はなおも言い張った。「下院の開会中にマッテオッティを殺せば、国全体がわれわれを攻撃することを彼はわかっているべきだった。彼にはいつでも使える飛行機があるし、誰かが彼を殴ろうとしても逃げ出すことができる。だけど全員が飛行機部隊をらせるわけじゃない。」

「じゃあきみもマッテオッティを殺させたのはムッソリーニだと思っているんだね？」

「殺したがっていた者が他にいるかね？ まさかぼくが命じたなんてきみだって考えてないはずだ。」

「まったく立派なやり方さ」わたしは言った。「帝国はあの行為をこれからも誇りに思うんだらう。きみはまだ帝国を信じているのかね？」

「帝国か、帝国」眉をしかめながら彼は反論した。「ぼくたちの遺体の修復は大変だらうし、葬列に加わってくれるひともいないんじゃないかな。」

ムッソリーニは歩兵部隊に警護されたヴィミナーレ宮殿に閉じこもっていた。ファシスト義勇軍では彼を十分保護できるとはいえなかったのだ。

緊急命令によるローマのファシスト義勇軍の総動員は惨澹たる失敗に終わった。路上で襲撃されることを恐れて家族が義勇兵たちを家の外に出さなかったのだ。最も勇敢な者たちまでが民衆から受けた侮辱によって意気阻喪してしまった。もし500人の反ファシストが大臣たちを襲撃していたら、全市民は彼らを支持していただろうし、ムッソリーニはそれを獲得したのと同じ速さで権力を失っていただろう。

他の都市の状況も首都のそれと大差なかった。新聞は、非常に穏健な立場のものまで、ジャコバン風の言葉遣いで語っていた。多くの地方でファシスト支部が閉鎖され、ファシスト系の新聞は販売停止になり、ファシスト義勇軍は解体した。

しかし反ファシズム運動の指導者たちの心理や思想の中では、蜂起はまったく問題にならなかった。反ファシズム運動はどのようなものであれ非合法的な企てからは無縁だった。《アヴェンティーノ》派は憲法を守る立場にあり、議会の諸規程と憲法によって定められた権利に訴えることにその基本的な力点を置いていた。老議会人たちはイタリアやフランス、イギリスなどで少しでも負債を負った大臣が辞表を提出した先例を思い浮かべていた。そこではアルベルト憲法の文言と精神の全体について注釈がつけられていた。《アヴェンティーノ》派は《ドゥーチェ》が辞職する義務を負っていると確信していたし、彼の意志に反してでも、世論の圧力あるいは国家元首の介入によって辞職させねばならないと考えていた。

しかしムッソリーニ政府は議会制にもとづく政府ではなかったし、国王もすでに深くかわりすぎていた。ムッソリーニを辞職させることは国王の事績を台無しにすることだからである。さらに反対運動が巨大なものであっても、ファシズムもかなりの程度まで武装していた。

《アヴェンティーノ》派は次のような構成だった。カトリック民主派、改良社会主義派、社会党最大限綱領派、民主派、共和派。蜂起戦術を主張したのは共和派だけだったが、彼らのごく少数であって《アヴェンティーノ》派が議会と国内に創りあげた団結を分裂させることは望まなかった。彼らは共産党と同じ失敗を犯すことは望まなかった。共産党は《アヴェンティーノ》派に2日間参加した後、そこから脱退したが、追隨するものもなく孤立状態になり、合法的活動も暴力的活動もできない状態に陥っていた。

それ以外のすべての党派は、政治的前提条件として、あらゆる非合法活動に反対の立場をとっていた。したがってこうした合法主義的諸党派の集合体である《アヴェンティーノ》派は、もっぱら法の範囲内での活動しか展開することができなかった。その力の源は団結と民衆の支持にあった。国民の圧倒的多数が《アヴェンティーノ》派の側についていた。もし国

王がこの事件の歴史的な重要性を正しく解釈していたならば、イタリアの王政はイギリスと同じように数世紀にもわたって強固なものとなっていたであろうし、われわれ共和主義者たちは民衆の怒りによって街灯に吊るされてしまったであろう。

この時期国王はスペインに滞在していた。それはスペイン国王アルフォンソ十三世が、憲法に定められた義務の解釈の点で彼（イタリア国王）をまねて、議会から政治屋たちを一掃して自らと国家の運命を見た目ばかりのサーベルに委ねた、その手際を賞賛するためだった。だが、ああ何ということか、プリモ・デ・リヴェーラ将軍のサーベルは竹光であることが判明するのだ [ミゲール・プリモ・デ・リヴェーラ将軍は1923年11月（イタリアと同じように）国王の支持の下にクーデタを起こし、1930年1月まで独裁体制を維持した]。もし国王がイギリスからイタリアに帰国していたならば、決意する前に長い時間をかけて熟慮したであろう。だが彼はイベリア半島から帰国したのであって、そこでは将軍と軍高官、枢機卿と司教、スペインの大物たちとサント・セポルクの騎士たちとしか会っていなかった。つまり民主的反対派や自由主義国家の教義にはいささか不向きな空気を呼吸してから、国王は祖国に戻ったのだ。

国王が帰国の準備をしている頃、あらゆる方面から攻撃を浴びていたムッソリーニは、世論の矛先をかわすために、フィンツイ議員に内務省次官の職を辞任するように強制した。

フィンツイは《ドゥーチェ》との会談の後で、彼から暗殺の脅迫を受けたと確信して、武装した支持者たちの小部隊とともに自宅にバリケードをほどこし、マッテオッティ暗殺の命令者としてムッソリーニの名をあげた覚書を書いた。この覚書はすぐに反対派の指導者たちのもとに届けられた。そして今度はチェーザレ・ロッシの番だった。彼も総理府出版局長職からの辞任を強制された。しかしそれ以上の悪い事態を恐れて彼はムッソリーニに次のようなよく知られている手紙を書いた。それはすぐに周辺の人々の知るところとなった。「きみは今ではパニックに襲われている。きみが冷酷な考え方から（しゃべらせないために）ぼくを殺す命令を出すとしたら、きみの経歴と体制の運命もおしまいになるだろうと警告しておく。」そして脅えたロッシも覚書を書いて、安全な家に身を隠した。フィリップペッリの場合も、新聞社を辞めてローマから逃亡した。彼もまた覚書を書いた。それは死を前にした告白だった。

「フィンツイ辞職！ ロッシ辞職！」

ニュースはイタリア中に広がった。そしてすぐそれに続いて、

「フィリップペッリが逃亡！ ロッシが逃亡！」

《アヴェンティーノ》派は、この無血のキャンペーンを見事に指揮していた。ムッソリーニは自分の参謀本部の全員を周囲から遠ざけてしまった。転覆から逃れるために大事なバラストを放り投げてしまったのだ。今度はデ・ポーノ将軍の番だった。彼もまた警視總監の職を辞任せざるを得なくなり、涙を流しながら自分をベリサリウス [ユスティニアヌス帝に仕えた東ローマ帝国の将軍。数々の戦功をあげたが陰謀の咎で左遷された] になぞらえて訴えてまわった。だが世論は満足せず、首相の辞任を要求した。

ドラクロワ議員を筆頭としてファシストたち自身が、後継者を見つけようと謀反を企み懸命になっていた。《ドゥーチェ》は食欲もなくなっていた。ファリナッチが打ち明けたところでは、《ドゥーチェ》は8キロも体重が減った。独裁者にとって辛い時期だった。国王のローマへの帰還は16日の午後になると予告された。

ローマ市民の半分が駅のまわりに押しかけた。

《アヴェンティーノ》派の執行委員会は困惑していた。王政支持の反対派は国王と協議すべきか否か？ そしてもし国王が反対派との話し合いを拒否したら？ 最後の瞬間になって、フィンツィ議員の覚書を国王に届けることにとどめるという慎重な意見が多数を占めた。ムッソリーニはもう死んだか埋葬されたものと見なされた。だが覚書が誰かを殺したことは一度もないのだ。

国王はローマに着いた。全イタリアは彼の唇から発せられる言葉にかかっていた。

王室の義務は複雑微妙なものだった。

速やかに身内の中だけで事態が整理されてしまった。ムッソリーニは内務大臣職を辞任し、合法主義者という評判で国王の信任も厚いフェデルゾーニ議員が後任となる。ドゥミーニの一派は、フィリップペリ、マリネリ、ロッジ等とともに全員がすでに禁固刑を受けていた。これ以上のことを国民は望むだろうか？

反対派は方向を見失ってしまったが、それでも動揺は終わらなかった。6月24日ムッソリーニは上院で演説を行った。

「これからは明快さと正義だけが存在することになるであろう。時代遅れの非合法性の最後の残滓は解消されるであろう。法の支配が永遠に再確立されるであろう。」

上院はこの演説に満足し、ときおり熱狂すら示した。スピリト上院議員は余りにも大きな声で賛意を表明したので呼吸不全に陥り、救急隊員によって医務室に運びこまれた。

ファシストたちも満足していた。「黒シャツ」たちはすぐに、ピストルとナイフを持って「ドゥミーニ万歳」と叫びながら、公衆の面前に再び現れるようになった。ファシスト義勇軍の兵舎には人目に触れるように大きな文字で次のような警告が書かれた。「ファシスト義勇軍に手を出す者は鉛の弾丸を食らうことになる。」

ムッソリーニは失った8キロの体重を次第に取り戻し、さらに2キロ増やした。状況は改善された。今なら自由にもう一度はっきり話せるようになった。——「あの頃われわれの敵側が言葉から行動に移るだけの思い切りがあれば、今頃は黒シャツをボロ切れにでもしていただろう。」

だが《アヴェンティーノ》派にはその思い切りがなかった。《ドゥーチェ》はその外見上はきわめて健康そうだが潰瘍に苦しんでいるという噂がその頃流れていた。これが死につながるほど重症だというのだ。細菌にまで頼るようになっていた。

8月にマッテオッティの遺体が発見されると、淀んでいた水がかき回された。闘争は、より激しい論争の形で再燃した。そして激化する一方のまま11月4日（第一次大戦の休戦記念日）まで続いた。この日は大規模な陰謀におあつらえむきの日と考えられていた。戦傷者たちは休戦を普通ではないやり方で祝おうとして、イタリア全土で大集会を計画した。この一日は反ファシズム気運の爆発の形で終わった。体制に対する反発が依然としてこれほど深く広範囲であるとは誰も考えていなかった。王政支持の反対派はこう説明した。この日の出来事は国王に決意させるのに役立った。それどころかこの行事をはっきりと求めたのは国王自身だった。

だが国王は目の前の異常な事態に気づかなかった。

終末に近づいている戦闘の最後の切り札である覚書はうまく使う必要があった。反対派の

指導者たちは覚書にきわめて高い戦略的重要性を与えていた。フィリッペッリとロッシの覚書が国王に届けられた。

国王はじっと立ったまま、まばたきもせずに、それを受け取った。

待つことにうんざりしたアメンドラは、12月29日の『モンド』紙でロッシの覚書を公開した。イタリア全土の新聞がその全文を再録した。アピールの進行中に、その対象が国王から国民に変わった。国中に新たな火の手があがった。すると本当にムッソリーニが命令したのだ！ たった一日でもまだ権力の座にとどまれるのか？ とどめの一撃として、フィリッペッリの覚え書きの公開が要求された。

ムッソリーニは攻撃に出ることで自分の身を守った。彼は新聞の事前検閲制実施を布告し、ファシスト義勇軍の総動員を命令した。

まさしくこれが決定的な時点だった。3人の閣僚が共犯者扱いに耐えられず、辞職した。国王から連絡を受けたアメンドラは、ムッソリーニがようやく辞職を余儀なくされることを発表し、平静を保つことを紙上で呼びかけた。余計な要請だった。30人ほどの著名な人物たちが、それまでの慎重な態度を厳かに取り消して、首相となる犠牲を払う用意があると宣言した。ドラクロワまでが、非常につつましやかな表現ながら、立候補を表明した。一度に30人の首相を職につけるのは難しい。だがどの人物も自信を表明し、協力者を募った。半日も経たないうちに、新政府の閣僚名簿は300人を超えた。

したがって勝利は目の前に見えていた……。

レッジョ・カラブリアではローマの特派員からの通信がムッソリーニ政権の崩壊を伝えた。あつという間に町中がお祭り騒ぎになった。あちこちで仕事が中断され、祝賀のしるしに商店は扉を閉めた。民衆の大デモンストレーションが反対派の指導者たちをたたえ、彼らの勝利を祝った。悪名の高いファシストたちは姿を消した。それ以外のファシストたちは過去の体制を嫌っていたことを表明し、デモに参加する許可を求めた。反対派の人々は感動した。体制崩壊後の復讐は一件も起きなかった。すべての人々が友情を交わした。県知事と警察署長は、国民の利益のために、ファシスト政府から与えられた責務を拒否できなかった理由を説明した。彼らは許された。過去は忘れられ、一致が祝われた。サルデーニャ島のゴンネッサでは、あるファシスト系新聞が冗談としてムッソリーニの辞任を伝えた。期待と感動が余りにも強かったために、このニュースは本当のことと受け取られた。町中の人々がすべて立上がった。レッジョ・カラブリアの同僚たちよりも運の悪かったこの町のファシストの指導者たちは、逃げるだけの時間がなくて痛めつけられた。小物のファシストたちは自分の家に閉じこもった。彼らの妻や娘たちは寛大な扱いを泣きながら求めた。同意が与えられた。即席の弁士たちが群集に教訓をぶった。そして完璧な精神の一致の中、野外で新政府への祝電が起草された。

だがいったい新政府はどこにあったのか？ ムッソリーニは依然として権力の座にあった。国民の不安は日に日に強まり、痙攣状態に達した。

1月3日ムッソリーニは下院で演説を行った。

「この聴衆とイタリア国民の前で、過去に起きたこと全体に対する道徳的・政治的・歴史的責任をわたしひとりが負うものである、と宣言する。」

戦闘は終わり、戦いに敗れたのだ。期待は潰え去り、粉々に砕け散った。辱められ笑いも

のにされた《アヴェンティーノ》派はその生を終えた。1月3日は新しい秩序を創り出した。ムッソリーニがマッテオッティ事件の責任者であるとの疑いを抱いたときに記章を外したすべてのファシストたちが、その疑惑が確実になった今、急いでもう一度記章をつけた。

ようやく今なら、がやがやいう民主主義的な声を無視して、正義はその正しい道を進むことができる。

そして新しい時代の性格を明確にするために、ファリナッチが党書記長に任命された。ファリナッチはファシスト革命のマラーだった。マリネッリ、ロッシ、フィリッペッリには特別な恩赦の政令が用意され、三銃士は司法の判断なしに出獄した。最高裁で裁かれていたデ・ポーノは、予審で無罪放免となった。重罪裁判所で裁かれていたドゥミーニ団の5人も、祖国と政治活動の場に戻ることができた。みんなが満足していた。それでも何らかの報奨が必要だった。寡黙で知られたマリネッリは、覚書を作成するという誘惑にただひとりストイックに抵抗したことによって、ファシスト陣営の中で報いられた。彼はすぐにファシスト党の監査に昇進し、国王は特別謁見という度はずれた名誉を彼に与えた。デ・ポーノ将軍は植民地相となり、祖国ではあれほど苦い思いを彼に与えたやり方でアラブ人たちを見事に扱うことになる。そして悲劇にはそのエピローグがあるように、マッテオッティ未亡人とふたりの遺児は混乱を求めた挑発者として街頭で侮辱されることになる。そして武器も持たずに行動したピューリタンの傭兵隊長であるアメンドラ議員は、ファシスト的な方法によって永遠の眠りの中で沈黙を余儀なくされることになる。

イタリア復員兵士同盟は最後まで声をあげることを望み、聖フランチェスコの聖地であるアッジジでの大会に集まった。彼らはあらゆる恫喝を粉碎し、体制に反対の立場をとり、憲法が規定するすべての自由を回復させることを求めた決議を圧倒的多数で可決した。

同盟の会長だったヴィオーラ議員は、大会の代表団とともに、サン・ロッセーレの領地にいた国王を訪ねた。彼の固く緊張した胸には金色軍事功労章が輝いていた。兵士のような気をつけの姿勢で、ヴィオーラ議員は国王に決議を提出し、回りくどい表現なしに復員兵士たちの考えを伝えた。

それは厳粛な瞬間だった。ヴィオーラ議員は自分がイタリア国民と戦争の犠牲者たちを代表していると信じていた。代表団の誰もが、これは歴史的な瞬間だと考えていた。息をひそめた彼らの目だけが国民の考えを伝える者の感動を表していた。どのような神託が下されるか、これ以上不安な思いで待っていた異教徒の代表団はなかつただろう。国王は青ざめた表情で話をすべて聞いた。そして幽霊のような陰気な微笑みを浮かべながら言った。

「余の娘は今朝ウズラを2羽しとめたのじゃ。」

代表団はうろたえた。国王だけは何やら勘違いした様子で、冷や汗を流しながら、ゆっくりと震えながら、同じ微笑みを浮かべて答えた。

「余はウズラのフライに豆を添えたのが大好きなのじゃ。」

こんなやり方で国王は、イタリア国民が主君に送った最も厳粛な自由の使節に、終わりを告げたのだ。

わたしにこの不幸な結末に終わった使節の話をしてくれたヴィオーラ議員は、こう叫んで打ち明け話を結んだ。

「まるで立ったまま死んでしまうかと思ったよ！」

彼、すなわちヴィオーラ議員も屈伏しなければならなかった、と記すのは余計なことだろう。

打ち破れない敵に反抗していったい何の役に立つのか？ 武器を投げ棄てて敵と同じ側に立つほうが賢明ではないか。

## 第二一章

《アヴェンティーノ》派には悔恨の思いだけしかなかった。国王の介入というカードで勝負して負けた以上、ゲームはもう終わってしまった。もはやテーブルに置くべき別のカードは残っていなかった。法とモラルは地面に投げ棄てられ、争いは純粋な力の問題になってしまった今では、民主主義には実力行動しか残されていない。だがそれに適した心理状態は一日で形成されるものではなかった。

ファシズムは失った領域を次第に取り戻した。ムッソリーニはわずかな譲歩をしながら、軍隊をも掌中に収め、陸軍大臣を兼務した。ファシストの一团によって重傷を負わされたアメンドラ議員は、その数日後フランスの病院で死去した。その一团を率いていたスコルツァ議員はその恩賞として党副書記長に抜擢された。カトリック議員たちは王太后の逝去をよい機会として、《アヴェンティーノ》派を見捨てて議場に戻った。議会の分裂状態は終わった。しかしファシストたちはカトリック議員たちにふさわしい乱暴なやり方で彼らを再び追い出した。《アヴェンティーノ》派は散り散りになり、《ドゥーチェ》は全権を把握した。《ドゥーチェ》個人に対する何度かの（本物あるいは偽物の）陰謀計画は彼を神聖な存在とし、陰謀に反発する暴力が全面的に繰り広げられる機会となった。社会党とフリーメーソンは非法化された。

こうして2年間が経過し、最終的に帝国の成立が宣言された。

1926年10月31日ボローニャでのファシストの大集会の際に、《ドゥーチェ》に対してピストルの銃弾が一発発射された。いったい誰が撃ったのか？ 事実は現在でも深い謎に包まれている。

ザンボーニという元ファシストの16歳の少年が下手人と叫ぶ声があり、彼はその場で（《ドゥーチェ》の目の前で）殺された。

このときは大暴風雨がイタリア全土に荒れ狂った。目立った反ファシストたちは憤激の嵐にもみくちゃにされ、彼らの家は略奪を受けた。体制に反対の立場をとる新聞社は破壊された。いたるところで暴力がふるわれる日が続いた。

その日わたしはカリアリの自宅にいた。夜の九時頃友人のひとりが息を切らせながらやってきて、ファシストたちが戦闘のための集合命令をかけていると知らせてくれた。何が起きているのかを見るためにわたしは彼とともに外へ出た。

通りに面した戸口にいたもうひとりの友人が、《ドゥーチェ》に対する暗殺未遂事件の情報がファシストと県庁に伝えられた、と教えてくれた。

「その電報のコピーをこっそり手に入れることができたんだ。ほらこれだよ。報復のためにすべてのファシストに緊急の集合命令が出されている。きみの家と命が危ない。カリアリの町を離れるか、安全な家に隠れるべきだ。」

彼が話している間にもあちこちの地区から行動隊員の集合を呼びかけるラッパの音が聞こえた。

わたしは家に帰り、家政婦に暇をやった。わたしは自分のことだけを考えればよかった。また家の外へ出た。広場にいた他の友人たちが走ってきて知らせてくれた。ファシストたちは彼らの中央本部に集まっている。素早く彼らを運ぶために自動車が走り回っている。わたしを殺すという叫び声があちこちで聞こえる、というのだ。

わたしは自宅から数メートルのところにあるレストランに食事に行った。食事をしている間に少しずつニュースが届いた。劇場や映画館など人が集まる施設はすべて閉鎖された。ファシスト行動隊が武装して巡回している。ファシスト本部ではわたしに対する懲罰遠征が準備されている。リーダーたちは火の出るような激しい演説をして部下たちを煽り立てている。わたしの名がそこで犠牲者としてあげられている。30分ほどで行動が開始されるだろう。

わたしのテーブルについていた給仕は戦争中の部下だった。彼はその後ファシストになったが、かつての上官に対するある種の尊敬の念を失うことはできなかった。彼はその夜とても困惑していて、わたしに話しかけようとはしなかった。何度か話そうと彼は試みたが、こちらから助け船を出すことはしなかった。そしてとうとう最後に彼はこう言った。「お願いします。どうかご自宅に戻らないで下さい。すぐにここを離れて下さい。わずか数日間の問題です。その後は平常に戻るでしょう。」

わたしは彼に尋ねた。「きみはわたしが正しいと思うかね？ それとも間違っていると思うかね？」

「あなたの言い分が正しいと思います」彼は真っ赤になり、自然に軍隊の気をつけの姿勢をとって答えた。

「だとしたら、なぜわたしが逃げなくちゃいけないのだ？」

わたしの質問は彼をさらに困惑させた。彼はもう何も言わなかった。外に向かいながら彼に言った。

「なぜきみはファシストになったんだ？」

「近頃は暮らしにくくて……彼らはたくさん私のことを約束してくれたし……。誰がファシストに逆らって生きていけるでしょう？」

1分後には家に戻っていた。わたしの自宅は共同住宅の二階にあって、広場に面して窓が5つあった。同じ階の隣には控訴院判事が住んでいて、彼は在宅していた。わたしは彼の家のベルを鳴らした。わたしは彼の司法官としての良心に訴えたかった。事態がどう展開したとしても、わたしに対してふるわれる暴力の証人になってもらいたかった。何の物音もしなかった。彼は恐怖ですくみ上がっていたのだ。建物の上の階もすべて静まりかえっていた。どの家の人々も急いで逃げ出したのだ。

わたしの家の前の広場は町のだ真ん中にあっただが、人っ子ひとりいなかった。家も商店も扉を閉ざしていた。遠くからファシストの歌声がやかましく聞こえてきた。わたしはがらんとした家の中でたったひとりだった。わたしは防衛の準備を始めた。猟銃が一丁、軍用ピストルが二丁に弾薬の備えは十分だった。戦利品である二本のオーストリア軍の鉄矛を壁にたてかけた。ふたりの若い友人が階段を駆け上ってきて、ファシストの一隊が向かってきており、わたしをリンチにすると叫んでいることを興奮しながら伝えてくれた。逃げるつも

りがないことを告げると、彼らはわたしを守ることを申し出た。わたしは彼らにその場を離れるように強く求めなければならなかった。彼らを送り出して通りに入る扉を閉めたとともに、近づいてくる一団からわたしの名前が威嚇を込めて発せられるのが聞こえた。

よるい戸を閉めて灯りを消した。こうすると、人から見られずに、昼間のように照明された広場で起こることが観察できた。わたしの家からは右手の、通りが広場につながるあたりに、キリスト教民主派の新聞『イル・コリエール』の印刷所があった。ファシストたちはここに侵入して内部を破壊した。

その次はやはり近くのアンジウス弁護士の法律事務所の番だった。ファシストたちはここも数分のうちに破壊し尽くした。この二カ所を首尾よく片づけて、ファシストたちはわたしの家に向かってきた。

「くたばれルッス！ ルッスに死を！」

一隊を指揮していたのは、わたしの昔からの同僚であり友人だった、カーオ伯爵だった。わたしは彼とはもう口もきかなくなっていたが、その夜わたしに対するこうした武装遠征の指揮をとっている彼を見て驚いた。

襲撃者たちの中には他にも知った顔があった。わたしを驚かせたのは、カリアリのフォワという男がいたことだった。彼は水夫たちを組織していたアナルコ=サンディカリストであり反ファシストだった。何度もファシストに襲われ、逮捕された経験を持っていた。ファシストたちが彼の組織の事務所を占拠すると、生計を立てる手段がなくなってしまった。彼はフランスに移民をしようとした。わたしが彼にそうするように勧め、現地の友人たちが仕事を見つけてくれることになっていた。出発前に彼はわたしに会いに来て、自分と家族（妻と3人の子ども）の苦しい状況について延々と訴えた。子どもたちの名前はそれぞれ「リベルタ [自由]」「スパルタクス」「リーベロ [自立]」だった。仕事が得られないことに絶望して、彼はフランスからサルデーニャに戻り、9月の末にファッショに加盟した。こうして今ではファシスト組織となっていた自分の組織を再び指導することができるようになった。昔の仲間に対しては、子どもを食べさせなければならぬことを理由としてわびていた。しかし自分のアナルコ=サンディカリズムの信念は変わることがない、と主張していた。わたしは今でも、なぜあの夜彼まで武装してわたしのリンチを求めているのか、と自問することがある。

その後彼が子どもたちの名前を変えたことを知った。将来、状況が変われば最初の名前に戻すことだってあり得ないことではない。奴隷としてバルバリア地方に連れていかれたあるキリスト教徒が、ムスリムに、またキリスト教徒に、と7回も宗旨を変えた話を読んだことがある。

時間さえあればこういった類の知人が他にも見つけられただろう。しかし通りに面した大扉は打ち破られ、2階のわたしの部屋まで続く階段は叫び声をあげる男たちでいっぱいになった。ドアがすぐに破られるものとしてわたしは防衛の準備をしていた。

ところがドアは壊れなかった。中で銃を構えて待ちかまえていると知らせてやったので、ファシストたちは最初の努力のあと、大げさに熱意を示す必要はないと考え始めた。

そこで広場を占拠していた部隊は3つに分かれた。ひとつはわたしの家に続く階段に入り込んだ者たちを支援する。もうひとつは広場に面した五つの窓によじ登る。最後のひとつは建物の背後にまわって中庭からの侵入を試みる、という具合だった。

このような戦術を予想していなかったわたしは、たったひとりで同時に三方から襲ってくる敵をどうやって防いでよいのか困ってしまった。最初の攻撃に対処するには、ある場所から別の場所へと素早く移動しなければならなかった。白状するが、わたしは生涯の中でこれほど苦しい状況にあったことはない。広場の喧噪はすさまじいものだった。窓を襲撃している者たちを広場の連中が嵐のような大声で激励していた。

バルコニーにひとりがたどり着いた。目の前に姿を現した最初の男に向かってわたしは発砲した。不運な男は下に落ちていった。

恐怖が群衆にとりついた。あっという間に広場から人影が消えてしまった。アパートの階段からは物音ひとつ聞こえなくなった。

カーオ・ディ・サン・マルコ伯爵は何度も部隊を再編成して、攻撃をかけ直そうと試みた。それも無駄だった。わたしの家には魔法がかかっているように思えた。読者はすでにご存知の《絶望部隊》<sup>スクアドラ・デスベラ</sup>の隊長ヌルキス氏の振る舞いはそれほどローマ風ではなかった。一発銃声を聞いただけで射られたものと思って気絶してしまい、戦死者として扱われてしまった。彼は棍棒とヒマシ油では古参兵であり、血なまぐさい大胆さの持ち主という評判だった。最初のスポーツ愛好的なファシズムの時期の後、彼も行動に加わるようになっていた。実質的に彼が遂行していたのは、放棄された家や孤立した無力な敵、女性や子どもに対する作戦行動だった。わたしの確認したところでは、危機が乗り越えられた現在では彼は大胆さと指揮官風を取り戻したようだ。彼は医師の診断書をつけて自分のリンパ腺の性質のせいにして、上官にいいわけしている。戦士の名誉という理由で、《大物たち》はこのスキャンダルに口をつぐんでいる。

半時間後、警察が動き出した。最初は警官が、ついでカラビニエーレが大勢現れた。全員がわたしの家を警戒下においていた。

わたしの家がカラビニエーレたちに包囲され、広場全体が軍事的に占拠されると、ファシストたちがゆっくりと再び姿を現した。最初はひとりずつ押し黙って、そして東になって叫び始めた。やっと勇気を取り戻したのだ。

ドアにノックの音がした。

「あけて下さい、ルッス代議士！」

それは警察署長の声だった。

「わたしの名誉と子どもたちにかけて、あなたを守るためにここに来ていると誓います。」彼の部下たちも声を合わせて証言した。

「その通りです。われわれ全員があなたを守るためにここにいます……」

わたしは、警察署長の言葉を信じられないほど自分が不愉快な状況にいることをドア越しに説明した。

「もしあなたが入りたければ、お入りなさい。しかし灯りは消してピストルで狙っていると警告しておきます。あなたひとりで、両手を挙げたまま入って下さい。」

「そんなことはできない！ イタリア王国の警察署長ともあろう者が手を挙げたまま入っては行けない。」彼はため息をついた。

「それでは、警視正をひとりよこしなさい。」

そしてかつての同僚で声をよく知っているある警視正の名前を伝えた。

「それはいい考えた」警察署長は言った。「警視正君、きみが行くんだ。」

取り決めにしたがって、警視正が両手を挙げて入ってきた。

広場には少なくとも千人のカラビニエーレがいた。

一時間後、警察署長も中に入れた。

多少困惑しながら彼はわたしに逮捕の通告を行った。わたしは刑法典を開いて正当防衛に関する部分を読み上げた。だが警察署長はなさねばならない辛い義務があることを説明した。つまり私を逮捕するという義務だった。

刑法が役に立たないことがわかると、わたしは憲法に訴えた。わたしは下院議員だった。会期中の議会のメンバーを保護するための免責特権は憲法で認められていた。この論拠も役に立たなかった。

わたしは手錠をかけられ、カラビニエーレの大部隊に護送されて監獄に入れられた。

翌日もカリアリの町中で暴力が続いた。反対派の代表者たちは全員が逮捕された。ファシストたちは彼らの家を破壊してまわった。わたしの家は数多くの部隊によって監視されていた。

殺されたファシストの葬儀は厳粛に執り行うように政府が配慮していた。すべての公務員、公立学校の生徒、全地域のファシスト義勇兵とファッショ支部、海軍と陸軍の代表者、司法官の全員、県知事と駐屯部隊の総司令官が葬儀に参加した。

公式演説では、死者はリソルジメントの犠牲者たちになぞらえられた。住民たちはこの儀式にかかわろうとはしなかった。

遺族はすぐに戦死者に対する恩給を受け取った。現在では少年ファシスト団の一隊が彼の名前をつけている。

カーオ・ディ・サン・マルコ伯爵はその後すぐに運輸省の次官に任命された。暗殺の企ては成功しなかったものの、その先頭に立ったことに示される熱意に対する報奨だった。

ボローニャの事件はすぐに政治的領域で影響をもたらした。国境が封鎖され、すべてのパスポートが取り上げられた。体制に反対するすべての政党、結社、新聞が廃止された。反対派の国会議員は資格喪失を宣言され、憲法と刑事訴訟法に定められていたすべての保護措置は取り消された。反対派の人々に対して島への流刑や死刑が制定された。古い体制はもはや完全に姿を消した。誰からも反対を受けずにファシズムと全帝国を支配したのは絶対的独裁者だった。

## 第二章

わたしはカリアリの監獄に13ヶ月間拘置された。イタリアの監獄の中での生活は愉快なものではなかったが、おそらく他のどの国でもそうだろう。予審は一日でできたはずだが、検察官は延期するのが適当と判断した。

手首を切る決意をしていて最後にはファシズムに転向した友人のことを読者は覚えているだろうか？ それがジュゼッペ・パツァーリア弁護士で、わたしの幼なじみで学友でもあった。わたしは彼の結婚式での立会人もつとめた。その彼が弁護士会の決定を伝えるために心痛の表情でやってきた。弁護士会もその頃ファシズム側に乗り取られていた。決定とはわ

たしを弁護士会の名簿から除名するというものだった。彼は弁護士会の書記をつとめていた。わたしは自殺の覚悟を彼に思い出させ、彼が本来の立場を貫かなかったことを残念に思う気持ちを持たせた。彼はわたしの顔を見ないで言った。「ぼくは生きているが、きみは死んでも同然だ。」たしかに彼の言うとおりであった。そのとき彼は生きていた。それは外見からもわかった。彼が太って顔色も良いのに対して、わたしは痩せて青白かった。事実わたしは獄中で、狭い独房の湿った空気と頻繁に行われる夜間の査察の際に冷たい風が吹き込むせいで、気管支炎と肋膜炎にかかっていた。

ガンドルフォ将軍の県知事時代にファシズムに移行した、ふたりの非妥協的な共和主義者の友人のことを読者はお忘れだろうか？ そのうちのひとりであるバオロ・ピッリ教授は、わたしが逮捕された頃には、相当な出世をしていた。彼は国会議員で、地元のファシストたちのリーダーだった。ファシスト党書記長トゥラーティは、あれほど有利な状況にありながらわたしを殺せなかった彼の部下たちの脆弱さについて、彼を叱責した。自らの断固たる姿勢を示すためにピッリ議員は激烈な記事を新聞に寄稿した。その中で彼はわたしに対して刑法が見出せる限り厳格な処罰を与えることを司法官たちに求めていた。望ましい結果が出ない場合には、判事たちに対する報復までほめかしていた。そうした熱意に驚いた親しい人々に彼はこう説明していた。「こんな風に振る舞わないと、ぼくは破滅してしまうんだ。」そして破滅しないために「狂犬（この比喩はわたしにとっては名誉だった）が祖国と人類に対する犯罪を犯した」という表現まで使った。

検察官は公判開始にあたって、わたしの行為を「おぞけをふるう」と形容した。カーオ・ディ・サン・マルコ伯爵は、予審の証人として証言し、彼が現場に来たのはわたしを攻撃するためではなくわたしを守るためだった、と明言した。県知事は、カラビニエーレと警察がわたしの支持者のように振る舞うことを許したために、退職させられた。

襲撃隊の一員で、悪名高い行動隊員でありヌルキス氏の仲間の、バルドゥッシという男が、年老いて病気だったわたしの母の家に行って彼女を侮辱しなくてはならない、と考えた。彼もまたあの襲撃の夜に銃声で逃亡し、広場を引き上げる逃げ足の速さで目立った存在だった。その後彼は、現場を見ていた仲間たちの間で、少しばかり威信を喪失してしまっていた。とはいえその連中にしても、喜んで彼を真似したのだった。今度はわたしの母に対する大胆な行動が、失われた自分の評判を取り戻すのに大いに役立った。

政府側の対応はすべてがわたしにとって不利に働いた。検察官はわたしを重罪裁判所に送付することを求めた。それは禁固20年を意味した。そしてその理由としては「若くして死んだ英雄」を大げさにつけ足した。イタリアでは検察官は警察署長よりも政府への従属度が強かったが、判事はそうではなかった。わたしがサルデーニャの外のアブルッツィのキエーティで裁かれることになる、とムッソリーニは島のファシスト支部に通告してきた。そこなら絶対に公平な判事が見つけられる、というのだ。キエーティの重罪裁判所は、すべてファシストの間から選ばれた判事たちが、マッテオッティの殺人者たちの公判中被告たちに握手を求めたことで有名だった。

サルデーニャ島の世論は政府の計画に反発し、これを妨害した。殺されたファシストの父親ですらわたしに対する民事訴訟を起こすことを拒否した上で、犯罪的企ての中で息子を亡くしたことだけでなく彼の家族の名でわたしに対する迫害が行われていることにも苦しんで

いる、と獄中のわたしに伝えてきた。あらゆる圧力にもかかわらず、判事たちはわたしを予審で釈放した。刑法と司法制度はまだ改悪されていなかった。

ファシストたちのいらだちは抑えようがないほどだった。

ただちに判事たちとわたしに対するデモンストレーションが派手に行われた。ピッリ議員は新聞紙上でのキャンペーンを再開した。重要な地位にあるファシストたちが、わたしをリンチにかけることまで提案した。

釈放の判決がでた後、本来であればわたしはすぐに出獄できるはずだった。しかし監獄は司法機構ではなく内務省の管轄下にあった。「公共の秩序を守る措置」としてわたしは監獄に留め置かれた。ファシスト国家防衛のための例外的法規を理由にファシストの委員会が召集され、行政的措置によって、わたしは「体制に対する矯正不能な敵対者」として五年間の流刑の宣告を受けた。

その頃わたしは三八度の熱を出して寝込んでいた。海洋性の気候がもたらす影響のために、島への流刑措置はわたしにとっては命取りになる、と医師たちは断言していた。《ドゥーチェ》がわたしの健康状態に個人的な関心を寄せていたので、医師の診断書がローマに送られた。

数日後、シチリアとカラブリアの間にあるエオリア諸島の中の小島であるリーパリ島へ直ちに移送せよ、との命令が届いた。それはまるでブイの上にわたしを配置するようなものだった。

「あいつは血を流すことなく自然に死を迎えるだろう」とピッリ議員はしつこいファシストたちに説明した。

わたしの症状では即座に移送するわけにはいかなかった。熱が下がるのを待たねばならなかった。監獄の担当医師は規則にしたがって、わたしが移送不能であると断言した。それでも政府は依然としてわたしを出発させるように命令した。

カリアリの町は非常に動揺していた。監獄の周辺には正規軍の特別部隊が配備された。わたしの脱獄を恐れていたのだ。わたしの独房には夜の間ひっきりなしに看守がやってきた。そして県知事はわたしが収容されていることを確かめる電話を何度もかけてきた。

警察署長はわたしが監獄から出発する場に立ち会うことを望んだ。

彼は微笑みながら静かに言った。「リーパリ島ではとても有名なヴェルナッチャ [サルデーニャ産のアルコール度の高い辛口の白ブドウ酒] がとれますよ。」そしてわたしに手を差し伸べた。わたしは酒を飲まないかと彼に答えて、そうした挨拶は無用だとも伝えた。政治犯の心理は囚われの身の王子の心理だ。

母に別れを告げる時間も与えられなかった。わたしは急いで港まで護送されたが、その途中で見たものは配置された正規軍部隊と自転車に乗った武装パトロール隊だけだった。

埠頭には人影はなかった。定期便の運行は中止されていた。いたるところに歩哨とパトロールがいた。警察のボートに乗ろうとしたとき、漁師の帆船が一隻、風に乗って速いスピードで港に入ってきた。船はわたしの目の前数メートルのところを横切った。ひとりの若い水夫がわたしの顔を見分けて、何が起きているのかを理解した。彼はひとつ飛びで船首に移動し、まっすぐに立って叫んだ。

「ルッス万歳！ サルデーニャ万歳！」

これがわたしの島との最後の別れだった。

波止場のパトロールたちが着岸する船に向かって殺到した。あの漁師が武装した男たちに取り囲まれて姿を消すのがちらっと見えた。

旅行中もわたしの発熱は続いた。

二日後、わたしは手錠をかけられたままリーパリ島に上陸した。本当に疲れ切っていた

「地獄へようこそ！」遠くにいたファシスト義勇軍の一団がわたしに向かって叫んだ。そしてわたしがまるでいまわのきわにあるかのように、満足そうに笑った。政治家の生命は、銃弾や火にさらされない限り、不可知論者の市民の生命よりも長く抵抗できることを彼らは知らなかった。

この陰気な挨拶の埋め合わせとして、一年前からすでに流刑されていた昔の政治闘争の仲間たちがわたしに会いに来た。その中には何人かの下院議員がいた。ベルトラーミニ、モレーア、パッツ、ヴォルピ、ピチェッリ、レボッシ、ラベッツァーナ、グロッジ、ピノッティといった人々だった。そこにはフリーメーソンの長であるダミーツィオ・トッリジャーニもいた。その日のうちにわれわれは小規模な議会を再構成した。王制の終焉を宣言し、共和制の樹立宣言を求める者もいた。

わたしは獄中の生活を今まで書いていないし、流刑中の生活（これも監獄の生活である）について話すつもりもない。獄中記は退屈なものだ。しかし流刑地の環境やまだそこに残っている同志たちの暮らしぶりを思い出してみよう。

反体制派の人々が流刑された島々の中でリーパリは一番条件の良い島だった。ファシズム以前には、ここに流刑されたのは矯正不能と判断された一般の犯罪者たちだった。流刑者たちに割り当てられていた領域は一キロメートル四方の土地だった。今では数百メートル四方になっている。流刑囚ひとりにつき兵士一名が配備されていた。病人か家族を伴っている少数の流刑者だけが自分たちの家に住んでいた。それ以外の者たちは、古い要塞の城壁の中にある、兵舎で眠ることが義務づけられていた。島民たちは流刑者たちに同情していたが、関係を持つことは禁止されていた。1927年11月から1929年8月までの22ヶ月の間にわたしが親しくなれたのは医師だけだった。流刑囚は世界と切り離されて生活しなければならない。リーパリ島を訪れた外国人ジャーナリストたちは警察官としか話すことができなかった。1927年のクリスマスにひとりのアメリカ人ジャーナリストが彼の友人であるモレーア議員と休みを過ごすために公然と島を訪れた。彼は上陸を禁じられた。

海はつねに海軍の快速艇や戦闘艇によって監視されていた。そうした船のすべてに探照灯と機関銃が装備されていた。昼も夜も海岸線の調査が行われていた。島に接岸する船に対する検査は戦時の基準で行われた。島に上陸する外部者は全員が監視のもとに置かれた。

夏の間、島の気候は熱帯のようだった。それ以外の季節は穏やかだが、変わりやすい気候だった。島に着いて一ヶ月後、わたしは二度目の重い肋膜炎にかかって寝込んでしまった。アルト・アディジェ地方のドイツ人反体制派の指導者だったノルディン医師は、アルプスの気候に慣れていていたが、この土地の熱病に感染して39歳で死んだ。病人は多かったが、そこにあった小さな病院が収容できる流刑囚の数は最小限だった。

流刑囚は全員が反体制派で、ファシストの委員会の行政的措置による有罪判決を受けていた。そこにはすべての党派が顔を揃えていた。アルト・アディジェのドイツ人やヴェネツィ

ア・ジューリアのスラヴ人の代表までいた。流刑囚たちは体制に反対であることだけが理由で有罪なのであり、かつてファシズムに敵対する行動を展開したことが理由ではなかった。その場合にはその事実はずねに犯罪を構成し、ファシストの特別裁判所の管轄下に置かれた。そこでの刑罰は禁固刑から死刑まで存在した。

生計の糧を持っている者はごくわずかしかなかった。裕福だった者たちも長い政治的迫害の間に彼らの貯えをすべて失っていた。その多くは労働者や農民だった。島では専門技能を要求する働き口はせいぜい10箇所ぐらいしかなかった。それ以外の流刑囚たちは政府から支給される日当で暮らすしかなかった。その額は1931年まで10リラだった。現在では手当額は一日5リラに引き下げられている。家族を連れてきた流刑囚に対してもそれ以上の額は支給されなかった。食料、衣服、シーツ、衛生用具、光熱費などを(いくら節約したとしても)このわずかな額で賄うことは不可能だった。儉約はひとりひとりが洗練されたやり方で実践する技術となった。だがやりくりにも限界があり、飢餓は技術によって解決できなかった。こうして結核と赤痢が囚人居住地区での支配的な病気となった。

何もすることがない多くの流刑囚たちにとって、唯一の気晴らしが読書とスポーツだった。今ではすべてのスポーツが禁止され、その頃存在していたささやかなサークルも廃止されている。1927年に流刑囚たちによって作られた唯一の図書館も閉鎖された。本に対しては厳しい検閲が行われ、ファシストの特別警察が許したものに限り認められている。

1928年までは相互教育の学校が存在したが、今では禁止された。

唯一のなぐさめは会話である。だが集団で集まることは違法行為であり、政治について話すことは禁じられ、違反者には禁固刑が課せられる。それでも適当な隠語を使って話したが、その場合も十分用心して定期的に見張りを置いた。書簡でのやりとりはずねに検閲の対象となり、極端に厳しい検閲によって元の書簡が廃棄されることも多い。そうした方が検閲に時間がかからないのだ。

限られた範囲の土地の中を自由に歩ける時間は、季節によって異なる特別な時間割で定められていた。昼も夜も点呼が頻繁に行われた。毎回の点呼は警察が監視していた。現在では夜間に12回の点呼が行われることもある。その場合には昼間に眠る。

流刑地の規則を少しでも破れば、3ヶ月から6ヶ月の禁固刑で罰せられる。規則は数十項目ほどある。そのひとつを紹介しよう。「第七条 流刑囚が疑わしい態度をとるを禁じる。」

この規則に一度も違反したことがない流刑囚は10人に満たない。

どれほど暑くても、夏は解放の季節として待ち望まれた。わたしたちは一日中海につかっているか、浜辺で寝ころんでいた。今では海水浴も禁止され、砂浜に近づくことも許されない。こんな暮らしは決して愉快なものではない。流刑囚は体制の強い力を毎日感じなくてはならない。要塞のてっぺんから軍楽隊がファシストの歌を演奏する。無力な反対派をあざける歌を歌いながら、ファシスト義勇軍の部隊が行進する。わたしが島で暮らしていた頃まではファシストたちの挑発行為は多くはなかった。だが今では上からの命令でそれが行われている。挑発行為をしないファシストは、革命的精神の不足と非難されて疑惑の対象にすらなるのだ。こういうわけでファシスト義勇軍の将校が自ら模範を示す。勇気は訓練する必要があるのだ。流刑囚たちが反発をすると、今度は至高の法律が登場する。1929年9月から31年末までに、272人の流刑囚が「ファシスト義勇軍に対する侮辱」を理由に有罪判決を受けた。

これと平行して、挑発分子の行動が続いている。この職業は最近ではずいぶん実入りが良くなっている。挑発分子は流刑囚として島にやってくる。誰もが彼の身分を信じ込むが、ファシスト警察だけが事実を知らされている。彼は政治家の役割を演じ、体制転覆の陰謀計画をそそのかす。リーパリ島にいてどうやって体制を転覆できるのか？ そのことは重要ではない。大事なのは強い意志である。彼はそれを持っている。流刑囚の大半は彼の言うことを信じずに疑惑を持つ。最も無邪気な者たちだけが彼の話に耳を傾ける。したがって国家は危機にある、という話を。挑発分子は最後の段階で祖国を失うことへの後悔にとらわれ、白状する。大量の逮捕者が出る。こうして1927年のクリスマスに一晚で250名が逮捕された。うち200名はすぐに釈放されたが、50名は一年間監獄に留め置かれた。その頃から現在までに、同じような試みが三回繰り返された。

法に則ったこのような攻撃以外に、流刑囚たちは別種の攻撃を受けることがある。つまりゲリラ攻撃のことだ。ファシスト義勇兵たちはその頃には言葉から行動に移る習慣がついていた。より大規模な軍事的企てのために訓練が必要だった。ファウスト・ニッティの本にいくつかのエピソードが紹介されている [ニッティは後述するように、ルッスの逃亡の仲間となる人物。これは1930年にパリで英語で出版された『エスケープ』という本のこと]。しかし1929年から今日までファシストたちは長足の進歩を遂げた。彼らには行動が必要だ。もし体制が危機的な時期を迎え、不安定な様相を示しても、ファシスト義勇軍は揺らぐことがないと暴力的行為によって明らかにするだろう。体制が厳粛なる儀式によって威信を獲得するのなら、ファシスト義勇軍はファシストの強化された力の確かなしるしを示すだろう。どちらにしても、流刑囚の収容所は彼らの作戦行動地域となった。こうしてカンパニーレ、トリブルツィ、センチネッリ、トゥッリ、コルシといった人々は1930年の冬に、病院にかつぎ込まれるほどひどく棒で殴りつけられた。カンパニーレは三ヶ月入院していた。流刑囚の中で彼が一番若く、おまけに大学生だった。そして若者に対処するにはエネルギーが必要だ、とされた。

1929年のクリスマスの頃、夕暮れどきに流刑地の遮断線で一頭の山羊がくしゃみをした。その近くにいたファシストの歩哨たちは身震いをした。これは陰謀者たちの蜂起の合図ではなからうか？ マスケット銃を胸にしっかり水平に構えて、「そこにいるのは誰か！」と叫んだ。山羊は返事をしなかった。すぐに発砲した。それ以外の歩哨やパトロールたちは全員が危険な事態と信じて腹這いになり、気が狂ったように銃を乱射し始めた。要塞のラッパは「警戒体制」を呼びかけた。すべての兵士が武器を取りに走り、彼らも銃撃を始めた。激しい戦闘時にいつも起こることだが、大きな銃声がさらに兵士たちを興奮させた。

戦闘はさらに激しくなった。モーターボートはすべて錨をあげて海の上を走り回った。抵抗を刺激するかのようになり、戦闘艇の大砲は水平方向に何発も撃たれた。弾薬が尽きて砲火はやんだ。長い戦いだったが、勝利の女神はファシストたちに微笑んだ。その夜35人の流刑囚と16人の一般住民の負傷者が確認された。散歩中に銃撃の不意打ちを食らい、住民たちは家の中に避難する暇もなかった。

その次の週には北イタリアから来た別のファシスト部隊と義勇軍は交代した。新たに到着した部隊は火器の使用を断念した。火器が役に立つのは開けた戦場だけで、大勢の人間に対しては近代的すぎた。市街地に対してファシストたちはもっと単純な手段を重要視した。こうして昔ながらのやり方に戻った。ファシスト義勇軍はローマの反ファシストである流刑囚

ミエロを捕らえて、独房に入れた。かれは最近行われた戦闘の技術を中傷するという罪を犯した。義勇兵たちは彼を裸にして乗馬用の鞭で打ち、塩水につかることを強制した。流刑囚たちはこうして新しい部隊の手の込んだやり方を理解した。新しい連中は突然かさにかかって権威を押しつけてきた。ローマのジャーナリスト、パオリネッリは流刑地の司令部に定期的に文書での要求を提出した。すると彼は義勇兵たちに逮捕され、裸にされた上で湿った独房に一晩中放り込まれた。

こういった例が次第に増えていった。そしてそれ以外にも新しい改良が加えられ、実施されていった。例えば、塩水の代わりにもっと衛生的な酢を使うとか、殴るのは足の裏に限るといった方法だった。このやり方では、広がりや失うが、密度は高くなった。

また別の機会には、彼らはすべてのやり方を用いてそれをひとつに統合した。それは特別な場合だけに使われた方法だった。サルデーニャ島出身のある流刑囚が体と足の裏を鞭打たれた後、塩と酢を振りかけられた。それでも囚人が一言も発しないのを見て、義勇兵たちは処置が足りないと考えた。たぶん腸の方がもっと敏感だろうと彼らは考えた。そこで囚人の体をテーブルに縛りつけると、塩水・酢・コショウを混ぜたもので洗腸を施した。

それにもかかわらず流刑囚の生命は尊重されている。今では刑法にもとづいて死刑判決が下される場合は、ファシストの軍事法廷ではなく、一般の裁判所である。もちろん長引く司法手続きを待つことが、体制の威信にとって不相当であり危険なこともある。その場合には当然のことながら、即決裁判が行われる。イストリアのノヴァク出身のスラヴ人流刑囚ジョヴァンニ・フィリップピッチは、1930年1月21日に棒で殴り殺された。パルマの労働者だった流刑囚ソラッツォは、銃剣で頸動脈を切られて殺された。前者は自分がイタリア人ではなくスラヴ人であると主張したことが理由だった。後者は遠慮なしにファシズム体制を批判したことが理由だった。

これほど限定された環境にいたので、ひとりの流刑囚が殺されることはまるで家族の悲劇のような重みを帯びることになった。しかしどちらの場合も、流刑囚たちの無分別な反発を避けるために、ファシスト義勇軍は大量の逮捕を行った。

イタリアでファシストの特別裁判所が死刑判決を誰かに下すと、リーパリのファシスト義勇軍は大喜びをする。太鼓とラッパを引き連れて、隊列を組んで勝利の歌をかなり立てながら行進する。流刑囚たちは兵舎に閉じこもり、兵士たちの大騒ぎがすぎるのを待つ。

こんな生活に対処するには精神を健全に保つ必要がある。ふたりの流刑囚が自分の部屋で首をつっているのを発見された。ひとりには1929年に、もうひとりには30年のことだった。

こんな地獄からどうやって出ればよいのか？ これは誰もが考える問題である。逃亡を試みるものに対して、規則は武器の使用を許可している。また3年以上の禁固刑と2万リラの罰金も法に定められている。それでも逃亡を考えない流刑囚はいない。船や飛行機や風船を使つての逃亡の計画を全員が心に抱き、提案し、議論している。逃亡の考えは妄想に転化する。これがリーパリ島で一番重症の病気だ。

わたしは1929年8月末にふたりの友人、カルロ・ロッセツリ教授 [フィレンツェで反ファシズム運動のリーダーとして活躍し、流刑されていた。逃亡後はフランスでルッスらと《自由と正義》という反ファシズム組織を作るが、1937年にファシズム体制の意を受けたフランスのファシスト組織に暗殺される] とファウスト・ニッティ [彼も《自由と正義》の運動に加わり、スペイン内戦に共和国側について参戦

したり、反ファシズム運動を積極的に推進する]、とともに逃亡することに成功した。彼らも5年間の流刑の宣告を受けていた。ロッセッリは反ファシスト新聞の編集長をつとめ、その3年前に改良社会主義派の指導者トゥラーティ議員をミラノから国外に逃す工作を組織した。この犯罪を理由として彼は1年間の禁固刑を受けた。ニッティは元首相と同じ名前(彼の従兄弟の息子だった)を持ちながら、それとは反対の立場の政治活動を展開する誤りを犯した。ニッティはリーパリ島に来るまでいくつかの島を渡り歩いてきていた。ファヴィニャーナ島、ウスティカ島、ランベドゥーサ島などがそれだった。

わたしたちはいっしょに《脱獄クラブ》を結成した。わたしたちほど地中海をよく知っている素人はそれほど多くはなかった。20ヶ月の間わたしたちは遠洋航海の船長であるかのように研究を続けた。ニッティは岩や暗礁、海岸を専門に研究した。ロッセッリの担当は荒海での航海術だった。わたしは暦と天文観測を受け持った。これをひとつに合わせると、それぞれの知識は相当に役立つものになった。とはいえ地中海の中にわたしたちだけが放り込まれたとしたら、数分のうちに溺れ死んでしまったことだろう。

ロッセッリにはふたつの有利な点があった。彼の妻はイギリス人で、わたしたちの政治闘争に関心を抱いていた。彼女は夫とともにリーパリ島に住む許可を得た。すぐに彼女も《クラブ》の会員のひとりとして認められた。イギリス人にとって地中海で逃亡することは、われわれイタリア人が浴槽の中で風呂に入るのと同じことだ。彼女も夫とともに逃亡するつもりだった。しかし他人に預けたくない子どもがいたことと、つまらない危険を冒すことになりかねないという理由で、彼女を説得することに成功した。この決定を容易にするのに、わたしのアリストテレス論理学の古典的素養と、ある夜わたしが北極星と火星を間違えるという失敗をしたことが大いに役立った。これが決定的な理由となった。彼女は一人息子を連れてわたしたちとともに冒険するべきでない、と考えたのだ。

ロッセッリ夫人はわたしたちより自由に行動できたので、彼女の協力はありがたかった。彼女はイギリスのパスポートを持っているので、監視されることなく旅行ができた。そして国外にいるわたしたちの友人や共犯者たちとの連絡をとることができた。ロッセッリには、またもうひとつの有利な点があった。彼の祖先たちが地上での事業で蓄積した財産を、海での冒険に大量に投入することができた。それがなかったならば、わたしたちはリーパリ島の揺るぎもしない保護観察施設の中でエレジーを作る詩人に、憂鬱な天文学者になっていた可能性が強い。今だからこうしたことが言える。

脱走の試みは4度失敗した。4回とも、それぞれ違う季節に、わたしたちは遮断線を越えて海に飛び込むことができた。歩いて戻っていくときの失望はどれほど大きかったことか！わたしたちの仲間が決められた時間に予定の場所に来れなかったのだ。運がよいことに、ファシスト警察はまったく気づかなかった。わたしたちを目標した何人かの流刑囚たちは秘密を守ってくれた。

五回目の試みが成功した。ある闇夜の晩に、迷彩を施した快速ボートに乗ってふたりの仲間が遠くからやってきた。そのうちのひとりOは遠洋航路の船長で、政治的迫害から逃れるために国外に亡命していた。もうひとりのDは流刑地でいっしょだった男で、これ以前の失敗に終わった逃亡にも参加していた。刑期が終わると彼は秘密裏に国境を越え、作戦基地にたどり着いていた。彼らはわたしたちの救援者であり、生命の危険を冒していた。彼らは武

装した兵士の前を通って港の中に入ったが、その大胆さが企てを成功させた。

数時間の間にどれほど多くのことが起きたらうか！ 警報がすぐに鳴らされたが、わたしたちはすでに沖に出ていた。予想していたように警察とファシスト義勇軍は逆上してしまった。追跡は非常に遅れて始まった。しかし運命は逃亡者たちの味方だった。

日が昇る頃にはすでにわたしたちははるか遠くにいた。わたしたちの中の一ひりが望遠鏡で水平線を凝視していた。

「悪党ども」船長がいかにもそれらしく叫んだ。「目をしっかり開いて、おしゃべりはやめるんだ。X岬の方向の黒い点が見えるか？」

わたしたちは口を閉じた。遠くの、肉眼でようやく見えるほどの輪郭が現れた。双眼鏡で見ると、戦闘艇のようだった。わたしたちは機械的にそれぞれの武器を持った。装甲艦に対する羽箒のようなものだった。

「Yの海軍基地が追跡を命じたんだ」ひとりが歯を食いしばってつぶやいた。

「監獄で埋葬されるより海で溺れ死ぬ方がましだ」もうひとりがささやいた。それは貨物船だった。わたしたちはその船を避け、すぐに船は視界から消えた。

またもや会話は陽気なものになった。

「だがこのファシズムは永遠に続くのかね？」

「どこもかしこも独裁だ！」

「独裁はスペインでもまだ強力だ。」

「ポルトガルでも！」

「コニャックをまわしてくれ。」

「ポーランドだって！」

「ユーゴスラヴィアでだって独裁は健在だ。」

「フランスじゃあコルシカ出身のコティが皇帝になりたがっているってのもっばらの噂さ [フランソワ・コティ (1874~1934)。化粧品製造で成功し、その後政界に進出して『フィガロ』紙を買収、『アクション・フランセーズ』誌にも投資するなど右翼的な政治活動を展開した。]」

「タバコはどこだ？」

「ハンガリーの話はよそうぜ。」

「ドイツのナショナリストは日に日に力をつけている。」

「ガソリンに気をつけろよ！」

「世界は右に向かっている！」

「世界は左にも右にも向かいはしない。世界は自転しているだけで、月食や日食が起きているだけだ。」